FateSeeker

issue ,3

制服学部メイドさん学科　TYPE-MOON 分科会
『睨月舎』 Presents

【CoverWorks】

皇　征介(Sprecial　thanks)

【Illustlations】

火星田レイ子　『望む事望まれる事』
PIN・X『どんなに甘く』
いちめどー

【CONTENTS】

どんなに甘く ..... 阿羅本　景　　3 p
イラスト ..... いちめどー　　18 p
望む事　望まれる事 ..... 阿羅本　景　　19p
編集後記 ..... 阿羅本　景　　52 p

どんなに甘く

阿羅本　景
イラスト　PIN・X

長く艶やかな髪に赤いリボン。
それだけで桜だと分かった。後ろから見ているけど、肩の細さも背中まで伸びた髪の長さも桜だったし、前に回れば桜が笑ってあ、先輩、こんにちはって挨拶するのも分かった。
同級生と一緒に話しながら歩いている。
そんな姿を垣間見て、ああ、随分桜も普通の女の子になったんだなと安心した。学校の中で昔見た桜は一人のことが多くて、回りに打ち解けてはいなかった。それは回りを見下したりするんじゃなくて、賑やかな場に自分が居てはいけないと自責する様な——
「ん……」
——俺の家に桜が着た頃も、そんな感じだった。
桜は俺の身の回りのことを手伝うと言って聞かなかったけども、いざ上がるとどうしても向こうが見通せないみたいな空気みたいなものを帯びていた。
あの頃は桜も遠慮があるんだな、くらいにしか思ってなかったし、藤ねえもしょっちゅう桜を気遣っていろいろやってくれたから、時間は掛かったけども家族みたいに接することが出来る様になった。
そんな桜にあんな事があったと知っていれば、俺はあのときに——
「あ……いけね、まだ頼まれゴト残ってた」
手にぶら下げた工具箱の重さで気が付いた。
一成が卒業して、別にこんなことをやり続けなくてもいいんだけど、校内生活の一端になってたんだから仕方ない。茶道部で何か壊れてたな、とか思い出そうとすると——
がっしゃん、と工具箱が鳴った。
それに気が付いた様に、桜の顔がこっちを振り向いた。
この穂群原の中で、工具箱の音を響かせて歩いているのは俺しか居ないんだから。
艶やかで匂い立つような、桜の笑顔。
立ち去ろうとした俺も、その顔に魅入ってしまう。
「あ、せ……ん、じゃなかった衛宮さん、どうしたんですか?」
桜がつっかえながら、そう言ってくる。
衛宮さん……というのはどうにもどうも、違和感がある。出会った時から衛宮先輩と桜だったから、同級生になってしまって衛宮さん、と言われるのは……俺の後ろに衛宮さん、といわれる知らない人が立ってるような気がする。
つい振り向いてえ?衛宮さん?と言いたくなるのを堪える。
「あ、うん、さ……間桐、またいつもどおりの修理修繕。次、茶道部」
同級生で桜、と呼び捨てにするのもなんだろう。
でも、桜もそう呼ばれてきょとんとしている。回りの娘は間桐さんと呼んでた気はするんだけど、俺に間桐、と呼ばれるのはやっぱり慣れないのか。
桜も後ろを振り返って、誰か居ないのかを確かめそうだった。
そんなそわそわしている桜の横の、ショートカットの女の子が明るく挨拶をする
「あ、衛宮さん、こんにちわー。生徒会のお手伝いですか?」
「んー、まぁそんなところ。あ、何か壊れたところがあったら生徒会経由じゃなくて俺に直に言ってくれれば直すから」
細川さんだったかな、もう少し目元がはっきりすると美人だな、と思う。
……正直、秀麗きわまりない桜が横にいるのが良くない気がする。桜といいライダーといい、回りの女の子には辛い存在だ。

3

などと口にしたらこの娘じゃなくて桜にも嫌われそうなことは言えっこない。

「えー、そうですか？でも……あそこ、頼んでいいのかどうかちょっとー」

「え、ほそっち、あそこってもしかしてー、えー、あんなとこ衛宮くんにたのむのー？」

古宇田さん……だったような。桜と仲良しというかどうかは微妙だけど、クラスメイトの様だ。

その口調はなんというのか、意外というか危ぶむというか、どこかからかってる気もする。あいちゃんそーだよねー、あそこに衛宮さん入れるのはちょっとー、とかきゃいきゃいと言い合っている。

「……」

桜も肩身が狭そうに、ひどくもじもじしている。

それは細川さんと古宇田さんが俺を困らせているからなのか……目線がどっかに泳いでいるので、こっちまで落ち着かない気分にさせられる。

「……あのさ、桜」

ああ、間桐って言わないでいつもの癖が。

桜がびくん、と肩を震わせてこっちを見る。下から覗き上げるような、どこか不安そうな仕草が可愛いが、その不安が俺に伝染しそうになった。

工具箱を掲げて、がしゃん、と鳴らせるまま。

こいつを掲げて桜に聞く。

「桜、どこか知ってるのか？　もし知ってるんならそっちを優先して直すけど」

「えー？　えーっ、えっ、そ、それは困ります！」

桜がぽん、と顔を真っ赤にする。

手が忙しそうに舞って、俺の前を遮る様な仕草で。一体何事が桜におこったのか。

細川さんになんでっ？とこの桜の慌て様をたずねると、きゃはは、と可笑しそうに笑ってくる。

馬鹿にされてる訳ではないけど、なにか、こうも反応が違うと複雑だ。

「やだもー、間桐さんこまらせちゃってるじゃないですか、衛宮さんー」

「なんか困ったことにそう見たいなんだけど、理由が分からない」

「だって、女の子だったらそんなこと言われてもやっぱりー、男の人に言うのはちょっとー」

「……で、ですから先輩、それは困ります！」

ああ、桜まで俺のことが先輩、に戻ってる。

でも違和感がないのか、二人もその呼び名につっこみをいれては来ない。

「桜ちゃん、素直に言っちゃいなさいよー」

「で、でも、やっぱり恥ずかしいよ愛子、うううう……」

うりうり、などと肘でつつかれて赤面する桜。

なんかこんな風に虐められ困る桜をみると、くらっとしそうな色気がある。可愛い娘だから虐めたくなるとかそういうレベルを超えた、どこか被虐美って言えそうなほどに。だから女の子でもそんなことするのかなぁ、とか僅かに。

「……あー、あー、こほん」

わざとらしく咳払いなどをしてみたり。

いや、桜に魅入ってしまうとなにか、危なくなりそうだったから。同級生の前で流石にいつもみたいな破廉恥な真似をしたら、いろいろと後始末は大変になるんだし。

今までの断片的なデータから考えると、うむ、そうだな。

「……何か壊れてるって、やっぱりみたいのが入りにくいところ？」

「確かにそうです、そこから衛宮さんが出て来たら大問題ですし、入っていくのを見られてもちょっと、藤村先生大激怒かなーってほどに」

……まぁ、彼女の口から藤ねえの存在がでてくるのは置いておこう。

そうなると、男性では入り難い女性オンリーの場所なんだろう。これ以上聞くのは野暮であり、用務員さんか誰かに任せるべきだろう。

だけど。

足下に目線が釘付けの赤い桜を見てると、どうしても続けたくなる。
「……桜、ひょっとしてそこ……」
「……」
「女子更衣室の電気とか、換気扇とか？」
たしかに、そこに俺が入っていくのは多いに憚りがある。たとえ修理をしていたとしても、出てくるところを見られると誤解は免れない。
李下に冠を正さず、の諺からすれば、俺は立ち寄るにやぶさかであろう。
ぱちん、と惜しそうに細川さんが指を鳴らして口元を曲げる。
「あー、確かに近いんですけどー」
「ほそっち、近くない近くない。似てるのは男女別って所だけ」
「でも、衛宮さんの回答は１００点中３４点って所だと思わない？　うん、全くハズレではないってあたりで」
「――――３４点なら赤点じゃないか、それ」
なんか、いつぞやの代数のテストの点数みたいで、胸の奥ががしくしくする数値だ。
優等生な桜には赤点の境界線で彷徨う悲しみ苦しみは分かるまい――じゃなかった、とにかく、さっきから真っ赤になって彫像の如く固まってる桜に、なんとか答えて貰おうと。
首がかっくん、と折れて下を向いている。
何か尋常じゃない恥ずかしがり様……すごく、悪いけども反面ぞくぞくするような興奮を覚える。胸の中で心拍が高くなっていたり、学生服の胸元が蒸れてきたりするのは秘密だ。
がしゃがしゃ、と工具箱が騒ぐ。中のモノがちゃんと座ってないから、か。
桜は俺の膝の辺りをじっと見つめていたけど、ピンクの口元がちらりと動くのが――
「……お……です」
「え？　お？　それどこ？　桜」
「で、でで、ですからその……お手洗い、です」
――お手洗い
そう言われて、成る程と腑に落ちた。
赤いシンボルの掲げられるあの女子トイレは、決して男性の立ち入ることのない聖域である。そこに俺が入るのも、出てくるのも、いや、その存在を考えることすらも禁断の――なんで、こんなに桜が照れ恥ずかしがってるのかも、一気に。
「あ……そ、そうなの？」
俺まで顔が熱くなってくる。
細川さんも古宇田さんも一瞬だけ、その恥ずかしげな空気に染まって口ごもる。
だけど、この二人は真っ先にそんな空気を吹き飛ばした。
「やっだもー、だから桜ちゃんこんなにはずかしがってたんですよー、それを言わせるなんて衛宮くんってさどー」
「さ、サド？　俺がサドだなんてそんな、いやむしろマゾっぽいんじゃないかと日々不安で」
「あ、ちょっとたしかに衛宮さんってマゾっぽいところあるかも知れませんねー。でも、そう言うことなら間桐さんもかなりマゾヒスティックな」
「あー、何となくほそっちの言うことも分かるなー、ほらこんなに赤くなっちゃって、このこのー」
ぷにぷにとほっぺたをつつかれても、赤面硬直の桜。
皆の前でお手洗いというのが余程恥ずかしくて勇気が要ったんだろうな、と。結局それでも桜は気恥ずかしさに固まっていたみたいだったけど。
頬をつつかれる桜が、可愛い。
このこのー、可愛いやつめー、と俺まで一緒に桜をつつきたくもなってくる。
ほら、桜って身体が何処も柔らかいからつつくと気持ちいいし、古宇田さんにつつかせるままにしておくのは如何にも勿体ない――じゃ、なくって。
「ひとまずサドマゾの話は置いておこう。で――」
「？　はい、衛宮さん？」
「手持ちに水回りの工具はあんまり多くないけど、そっちが壊れてるなら、行くけど」
まぁ、ご婦人のご不浄に立ち入るのは気が引けるが、困ってるんなら助けないと。

5

なにものぞきに行ったりするわけじゃなくて、たんなるトイレの修理なんだし――
「だっ、だだだ、駄目です先輩！」
ばつーん、とバネ仕掛けみたいに桜の顔が上がって激昂している。
いきなり蒸気弁がはずれたみたいな回りがびっくりする大声。ぎゅっと腰に手を握りしめて起こっているのが、あまりにも突然の気色でこっちまで仰け反りそうだった。
「いや、どうして、なんでさ、桜！」
「だめです、私が駄目だと言ったら駄目なんです！　それくらい分かってください先輩！」
「分かってくださいっていわれたって、わ、分かるもなんも！」
噛みつきそうな桜の意地を前にして、はい、と大人しく言えない俺。
だって壊れてるものは治さなきゃこまるでしょうが、女子トイレだから俺が使わないから俺は困らないけど、桜とかは特に！
「あー、すごいすごい、桜ちゃんがこんなに本気になってるー」
「あれは本当だったのね、間桐さんは衛宮さんだけどうにも反応が違うって」
……ひどく無責任なギャラリーのコメントまで聞こえる。
どうせなら、なんで桜がそんなに嫌がるかの理由を……いや、わからないか。
桜はぷーっと頬を膨らますと、すっと手を伸ばして俺の手首を取る。
「あ、手を握っちゃったりしてるー」
「……先輩、先約があるんですよね。トイレのことはいいですからそっちを先にしましょう」
「もちろん茶道部は蔑ろにする訳でもないけど、桜……やっぱりその……」
俺がそう言うところにはいるのが、やっぱり桜なりに駄目なのかなー、と。
桜は頬を膨らませたまま、俺の手をぐい、と引っ張る。これ以上なんでかと聞かせない一種の気迫を感じて――他の子に目線を向けると。
「衛宮くん、やっぱりちょっとそれは、この、桜ちゃんじゃなくても頼めないわね」
「修理は私たちから学校に伝えておくから、衛宮さんは間桐さんとご一緒にごゆっくり」
「ほ、細川さん！　私はなにもその、先輩に……う……うう……」
ぬふふ、と笑う二人に囃される桜は落ち着きがない。
俺だってそうで、桜とご一緒にごゆっくり、なんて誤解の多い促され方をすれば……
桜が伏し目がちに俺を見るけど、すぐにすぱっと顔を上げる。
「行きましょう先輩、茶道部ですよね？」
「そうだけど……いや、桜、なんか用事とかはあるんじゃないのか？」
「はーいお二人様ご休憩御案内ー」
桜に腕を引っ張られ、女の子にはろくでもない囃し方をされて俺は廊下を進む。
腕に持った工具箱はがしゃがしゃとうるさいけど、それよりも――髪を僅かに靡かせて歩く桜の姿に、手首を握る指の細さに我を忘れて付いていった。
桜に手を引かれて歩く、こんな珍しいことがあるものだなんて考えながら。

§　§

「……お、まぁ簡単だな、これくらいなら手持ちで何とかなる」
茶道部部室に上がり込んで、風炉のヒーターを分解している。
この学校の茶道部というのも活動が謎な部活で、華道部とかは生け花を昇降口に飾ってたりしているのでわかるけども、この改造茶室でずっと修行しているのだろうか。
……いや、文化祭で何かしてた気がする、思い出せないけど。
掘り抜きの釜の底から取り出す電熱器はあまり風情のある姿をしていない。
本当はこの風炉も炭火で湧かしたいのだろうけども、火気厳禁の部室棟では電熱器が精一杯だった。で、その電熱器も壊れていたとなれば茶道部も自然、活動停止状態になる。
そこで、上がり込んでいるのは今は俺と桜だけ。
簾子窓から差し込む午後の光が、畳の上に柔らかい桜の陰影を描いてる。
「確かになぁ、電気ポットだったり、給湯室から薬缶持ってきたりすると風情がないし」
「そうですよね、先輩……すぐ直りそうですか？」

俺の横にはちょこん、と正座した桜が居る。
別に修理するのに人手が必要だった訳じゃないけども、いつのまにか桜が上がり込んでいた。もっとも茶道部室まで俺を引いてきたのは桜なんだけど――

俺は胡座で、手に取った電熱器をばらし始める。
工具箱を開けて桜は、まるで助手然と構えている。
手を伸ばして、桜に話し掛けた

「プラスドライバーと、なんかビスを置いとく皿みたいなものがあったら。ハンダゴテはいらないから」
「はい……あ、これでいいですね、先輩」
「さんきゅ……バイメタルの歯が歪んでるから切れっぱなしだ、これが本気で駄目だと正直買い直し……勿体ないなぁ」

くるくるとビスを外して、桜が差し出している小さなお皿にかちかちと落としていく。
構造は至って簡単、１００Ｖの電熱ヒーターに、加熱しすぎない為のバイメタルの温度センサー。今時半導体も使わない簡単さが風情に染みる。
なので、余計こんな物を前にして匙を投げたくない。

「でも、先輩すごいですね。ちょっと見てただけで分かるなんて」
「……これも魔術なんだけどね、まぁずるしてＸ線の透視図とか設計図見てからバラしてるみたいなもんだし……桜のほうがこう言うの、上手いんじゃないのか？」

かぱっと耐熱樹脂のカバーを外しつつ、話し掛ける。
うへ、手入れしてないから中に埃が……これだと壊れるのは時間の問題か。
桜もぽふん、と上がった埃に僅かに眉を顰めている。

「残念ですけど、私には先輩みたいに細かいのは、あまり」
「……なんかなぁ、遠坂といいライダーといい、魔術を使う女の子には敵わない運命なのかね、俺は」

桜が差し出してくれたティッシュで、中を拭ってみる。
遠坂は今ではロンドンでバリバリ売り出し中の魔術師――なんだろうか、とにかく留学していってしまった。ライダーは元はサーヴァントだから魔術に詳しいなんてモノじゃなくて、魔術そのもの。
こう、大人しい桜だって魔力量という面では遠坂やライダーが束になっても敵わないんだし、その魔力あってこその今の俺だったりする。

桜が笑う、それはどこか心苦しく、戯ける様に。

「まだ全然私、だめだってライダーに言われます。元から素質はあるからすぐに姉さんくらいにはなれるって言ってくれますけど、それってリップサービスですよね」
「そうかなぁ……ライダーはそういうの得意じゃなさそうだから、本心じゃないのか？　って、マイナスドライバー、小さめの奴」

マイナスドライバーで、感熱部を浮かして確かめる。
ライダーは我が家に居候しているけども、確かにどこか飄然として掴めないけどお世辞を言ったり嘘を言ったりは出来ない質だと思う。その辺、まぁ俺や桜に似ているところはある、のかも。

「そ、そうですか？　でも私、姉さんみたいになれないなぁ……」
「……」

ちらり、と桜の顔を盗み見る。
桜が遠坂のことを話す時には、簡単ではない。なにしろ生き別れの兄弟で、桜に降りかかった身の上のことを考えれば……かつてのそれは愛憎というべきもの。今は遠い憧憬なのか。
思い出してしまうと、口元が苦くなる。
舌の上に甦るのは鉄の味。いや、摩耗する味覚が伝えてきた、味にならない感触。
あの悪夢の様な戦争の日々が、記憶に鋼の様に差し込まれる。目の前にある電熱器のニクロム線の模様は、忌まわしい天の杯を彷彿とさせて――

「先輩、やっぱり、むずかしいですか？」

――優しい声に、はっと意識を取り戻す。
いけない、つい物思いに耽っていたようだ。電熱器を眺めている俺は、まるで修理に困惑しているみたいに見えるのか。

7

「あ……いや、ちょっと考え事。こいつは大したこと無い。ちょっとした接触不良だから、ずらせばなんとかなるだろう」
「あ、よかった……もし直らなかったらどうしよう、ってちょっと心配になってました」

ささやかに、桜が笑う。
簾子窓と塗りの壁を背負った桜の屈託のない、柔らかい姿。畳の上に正座する制服姿の桜は幸せそうで、どこか――遠い。
錯覚だ、それは――綺麗すぎるから、この畳の縁より向こうに手を伸ばしては行けない気がする。眼差しの優しさも、口元の優美な感じも、すごく綺麗で――こんな胡座を掻いて機械を弄り回す俺が、困ってしまう。

「……まぁ、桜はそれを心配しなくてもいいじゃないかと思うけど」
「え？　でも、先輩が直せなかったらちょっと困っちゃいます、一緒にいた私も。だって」

桜はほんの僅かに肩をすくめて。
その仕草は、俺がしたいたずらに気付いて笑うみたいに。

「直らなかったら、先輩、夢中になっちゃって何時帰れるかなー、って」
「あ……まぁ、そうだな。しまったな、ずっとそれで桜に迷惑掛けっぱなしだった……」

桜の観察眼の確かさに舌を巻く。
今まで治すのが簡単だと思ったがらくたほど、直らないと俺が熱中することを桜は知っている。その結果、真夜中に土蔵の中で眠り込んで、翌朝桜によく起こされたんだから。

……何か自分が、聞き分けのない子供になってしまった様で恥ずかしい。
指先で頬を掻くと、話を逸らす様に――

「まぁ、すぐ直る。これをこうして……あーそうだ、桜」
「はい、なんですか？」
「ちょっと水汲んできてくれないか？」

電熱器を直しながらそう訊ねると、水ですか？と桜が首を傾げる。
カバーをしてビスを止めなおす。修理と言うにはあまりにも他愛ない、これくらいすぐに……と思うけど、機械に詳しくない女の子達ばっかりの茶道部に言うのは酷か。

「先輩、喉が乾いたのでしたらコーヒーでも、買ってきますけど？」
「あ……いや、俺が飲むんじゃなくて、これ」

小首を傾げる桜に、俺は風炉の釜を指さしてみせる。
まぁ、狸が首と手足を出して綱渡りをしながら笠を回しそうな、そんな釜だった。これを持ち上げてヒーターを取り出すのが一苦労だったんだけど。

「これ、ですか？」
「ちゃんと電熱器が動いてるか、お湯が沸くか試さないと。これを乾煎りするわけにもかないだろ、だから」
「――――あ」

それで、ようやく桜も納得がいったみたいだった。
掘り抜きの釜に潜って、電熱器をセットする。ただ温かくなることが分かればいいんだけど、まぁ念には念を入れて。こういうのは茶道部の人間立ち会いが望ましい筈なんだけど。

「そこまで修理請負やってるわけじゃないしな」
「よいしょっと！」
「そもそも、ボランティアなんだから、チェックするのもサービスの一環……ん……？」
「それでは先輩、行ってきますね」

朗らかで楽しそうな桜の声。でも、何かすごくおかしい気がする。
一体何事かと思って顔を上げると――

桜が、鋳物の茶釜を両手に抱えて出ていこうとするところだった。
……あれは軽くない気はしたんだけど、それでも女の子が持ち上げられない程じゃない。いや、なんだ、すごく間違ってるそれをどう指摘したものか、悩む。

「？？　どうしました？　先輩？」

きょとんと桜が不思議がって振り返っている。
制服に茶釜を持った桜というのは、これはこれでなかなか絵になる――んじゃなくって、その、どういったらいいのか。

「桜……それに汲んでくるのか？」
「はい……これでお湯を沸かすんですよね、でしたら……あれ？」
胡座を掻いて、強張った俺の様子に気が付いたみたいだった。
桜はととと、と茶釜を持ったまま戻ってくる。その様子は愛らしくも、どこか恥ずかしくておかしい……あー、と困った呻きを漏らすと。
「な、なにか間違ったことしました？　私」
「茶釜はその、薬缶と違うからそのまま水道水を入れるのはちょっとどうかと、思う」
「あ……そうなんですか」
どしん、と畳に茶釜を落とすと、桜は困ったように肩を下ろす。
そもそもこれに目一杯水を汲んで桜が戻ってくるのも不安だったし、それが沸くまで待つというのも気が長い……というか、流しで茶釜で水を汲む桜の姿というの、こう。
「あ……そうですよね。私の家ってずっと洋風だから、お茶のお茶のお点前とか習慣とかその、分からなくて」
桜が俺の沈黙を非難だと受け取ったのか、肩を竦ませてしゅんとしている。
いや、俺は全く桜を攻めるつもりはない。桜の無知を殊更にあげつらう気はないから、ぽん、と膝を叩いて立ち上がるが上がる。
「水入れがあったはずだから、これで……」
俺が茶道部室の一隅にしつけられた棚に向かい、瀬戸とおぼしき水入れを見つけると、後ろから桜が覗き込んでくる。
茶道というのが遠い習慣なのか、並んでいる棗も茶筅もひどく興味深そうに見つめている。
「先輩、やっぱりああいう和風のどっしりとしたお屋敷に住んでるから詳しいんですね」
「……いや、俺も手前とかからっきしだぞ。こういうのは案外藤ねえが知ってたりするから……」
感心している桜に、意外なことを言ってみたりする。

藤ねえがああ見えても茶道の人なのではなく、あの一家にそういう素養があるということだ。兄さんたちはともかく、雷画じいさんは大物らしく書画骨董茶道武道を良くして、ハーレーに跨ってツーリングを欠かさない両刀使いところか三刀使いくらいの訳分からない人だ。
藤ねえもそんな爺さんの薫陶の甲斐はないタイプけど、それ経由でいろいろ知っていたりもする。
「俺も藤ねえ経由でちょっと知ってるだけ。あの家、離れに茶室があってね」
「へぇ……すごいですね、今度藤村先生にお呼ばれされたいなぁ」
「――ちなみに藤ねえ自信は立ち入り禁止だぞ、あそこ」
まぁ、なんで立ち入り禁止になるのかは言うまでもないが。
水入れを渡された桜はきょとんとしているが、やがてなぜか納得がいった様に、くすりと笑う。額に掛かる髪が柔らかく、午後の光の中で輝いている。
「あはは、そうですよね、藤村先生が入ったら大変なことに」
「趣味おかしいからなぁ、うーん、爺さんが孫ながら育て損なったわ、とかなんとか」
どういう事件があったのかは想像に難くないが、きっとそれを上回ることなんだろう。
……藤ねえをネタにして忍び笑いするのはなんとなく趣味も良くないけど、桜との時間が柔らかく穏やかであるんなら、なんでもよかった。
俺も相好を崩すと、それで桜も嬉しそうで――胸の中がじん、と染みる。
「それじゃ、私行ってきますね。すぐ戻りますから」
「ああ……」
畳の座に戻ると、腰を下ろす。
桜が上履きを履いて、長い髪が屈んだ拍子に落ちる。
それは、さらりと――指を通してもまったく引っかからないみたいに、さらさらで。
僅かに振り向いた、桜の頬が――綺麗だった。
「……」

9

知らず、居住まいを正す。
別になにも緊張することはないけども、桜が出ていって一人になると正座になってみたりする。なぜか――そう、たぶん桜が綺麗だったから。そんな綺麗な桜を迎るのに、胡座を掻いて猫背になっててはいけない気がしたから。
「ああ……ここでなぁ、ちゃんと煎れ方しってると、格好付くんだけどな」
生憎、礼儀作法は人並みでもそういう伝統芸能に無縁の人間なのでいかんともしがたい。
そもそも俺に、紋付きでこんな和室にうむ、などと言いながら座ってるのが似合わない。それなら桜なんか和服でしんなりとしているので、すごく絵になる気がする――
桜が。それが、いつも俺の頭の中に去来することだった。
いや、それだけでいいんだ。それだけで良いというのが、幸せと言うことなのかもしれない。
桜のための味方になるのなら、俺は桜のことだけをただ一念に……
「……」
簾子窓の向こうを見る。
障子の向こうは見えないが、暮れゆく太陽が傾いているんだろうか。
畳に伸びる影はぼんやりとして、だがそれでいながら――俺の影が呟いている。
――いいのか、それで、と。
未練は俺の心にはもういなくて、もはや俺の影は囁くことしかが出来ない。その影をじっとにらみ、心の内を囁きかけた。
「……そうすると決めたのが、俺だから」
「決めた――ですか？」
は、と顔を上げた。
戸口は空いたままで、瀬戸物の水入れを持った桜が、俺を見ている。
いつの間にか口にしていたのか――咄嗟に口元を押さえて隠そうとする。いや、俺のことなんかどうでもいい、そこに立っている桜が意に違わず綺麗だった。
――けども
「いや……いろいろと。一番心に決めたのは、桜の味方になるってことで」
「――――」
茶室の畳に上がってくる桜の顔が、一瞬見えなかった。
角度のせいか光のいたずらなのか、それでも俺の心に差す影が伸び上がって隠しているのか分からない、でも、その顔が見えないことが俺の息を止める。
いや、桜が――そんなことを聞かされた顔を見られたくなかったのか。
嬉しいのか、悲しいのか、ふわりと立つ桜の雰囲気はどちらにも読めた。
「……ああ、さんきゅ。こっちに……」
上がった顔の桜は、普段の穏やかに笑う桜だった。
あの一瞬の表情がなにだったのか、分からなかった。どんな顔をしていても桜は桜じゃないか、と自分を叱咤する――そんな、いちいち桜の顔色を窺って迷っていたら俺は何も出来ないじゃないか、と。
正座で、俺の傍らに控える桜。水入れを渡されたのも忘れて魅入るほどに、しなやかで美しい。髪は艶やかで、唇は柔らかく。
つい……辺りに誰もいないのかを確かめてしまう。居ればこんな風に観察している俺が恥ずかしくもあるから……
「……」
俺と桜は二人で、蓋を開けた釜を前にしている。
柄杓で水入れから茶釜に注ぎ、風炉のスイッチを入れる。どれくらいの出力があるのか、まさか１０００Ｗもあるわけないから、時間掛かるかなーなどと思いながら。
茶釜に目を遣りながら、言い出す言葉がない。
茶室の中には煎れた畳の香りと、桜の僅かに甘い花の香り。
一尺も離れぬ向こうにいる桜が、何よりもこの茶室を艶やかに彩っている――

「……先輩」

唇に、噛むような言葉。

柄杓を手に取りながら、僅かに桜の顔を窺う。僅かに顔を傾けて俺を見る桜の顔は、あどけなくはにかんでいた。それは、花を差し出す童女の様に。

「私、お茶とかお花とか始めてみようかなー、とかちょっと思いました」

「へぇ……いや、良いんじゃないかな」

柄杓の柄でぽん、と手を叩きながら相槌を打つ。

俺がこんな茶道の真似事をするより、桜がした方が遥かに格好になる。弓道部の桜も良いけども、茶道に勤しむ桜というのも悪くはない。

「こういうの、見てるとやっぱり良いなぁ、って思うんです。静かで、綺麗で、落ち着いていて。だから私もお茶とか振る舞える様になれば、きっとその……」

「……その？」

「……」

桜の顔が僅かに俯く。

意地の悪い訊き方をしてしまった気もするんだけど、悪気はない。

桜の口元に、恥ずかしさと嬉しさをを唇に僅かに漂わせる。

「先輩と一種の……先輩のお家で、こういうことできたら……幸せですから」

釜の松風のように、静かに桜の声が空気に満ちる。

幸せですから、という言葉に万感の思いが――なんて言うと陳腐になって堪らなくなるほどに、言葉が胸をわしづかみにする。

感嘆が肺の中から全てを追い出す。

「……ああ」

桜が幸せだから、そう言われれば俺の心臓はただ、それに歓喜のままに震える。

この身体は桜のためにあり、その喜びは俺の喜びになってどうしようもなく震える。思わずその場に蹲りたくなるほどに、骨まで痺れて――

まるで痛みと痺れに苛まれる様に、身悶えを封じる俺。

あまりにも幸せすぎると、こんなに苦しいほど。幸せの向こうにどこか罪の味を感じるほどの、こんな身に余る。

「……ああ、そういうのはいいな。……でも」

「でも？」

「お手前とか、そういう鯱張ったのは別にいらない。俺は桜と一緒なら、なんでも――」

柄杓を下ろす。

手を伸ばして、桜の掌を取る。

ほんの少し、桜が怯えて竦んだ。でも、手を取ると骨まで柔らかい桜の掌。

「先輩……あ……」

「……桜と一緒なら、何処だって、何をしてたって俺はいい。そうすることに決めたんだし、なにより――そうしたい。そうしないと俺は俺じゃなくなるから」

「……は……い……」

我が儘なことを口にする。

それでも、そういわないと吐き出した肺の中が空っぽで、息も何も飲めなくなるから。桜が愛しくて窒息するなら、そんな歯の浮く様な言葉でも口にして、この時間を続けたい。

掌に温かい桜、それを持ち上げて寄せていく。

唇が震える、初めて桜を抱き寄せ、初めて口づけした時と同じように――

どんな香よりも官能的な桜の香り。五感が全て桜に従うのだから、この香りは俺の脳まであっという間に染め尽くしてしまう。

どんなに甘いのか。

その肌は、どんなに俺の唇に触れれば融けるのか――

「あ……ん、先輩……」

押し頂いた手の甲に、口づけする。

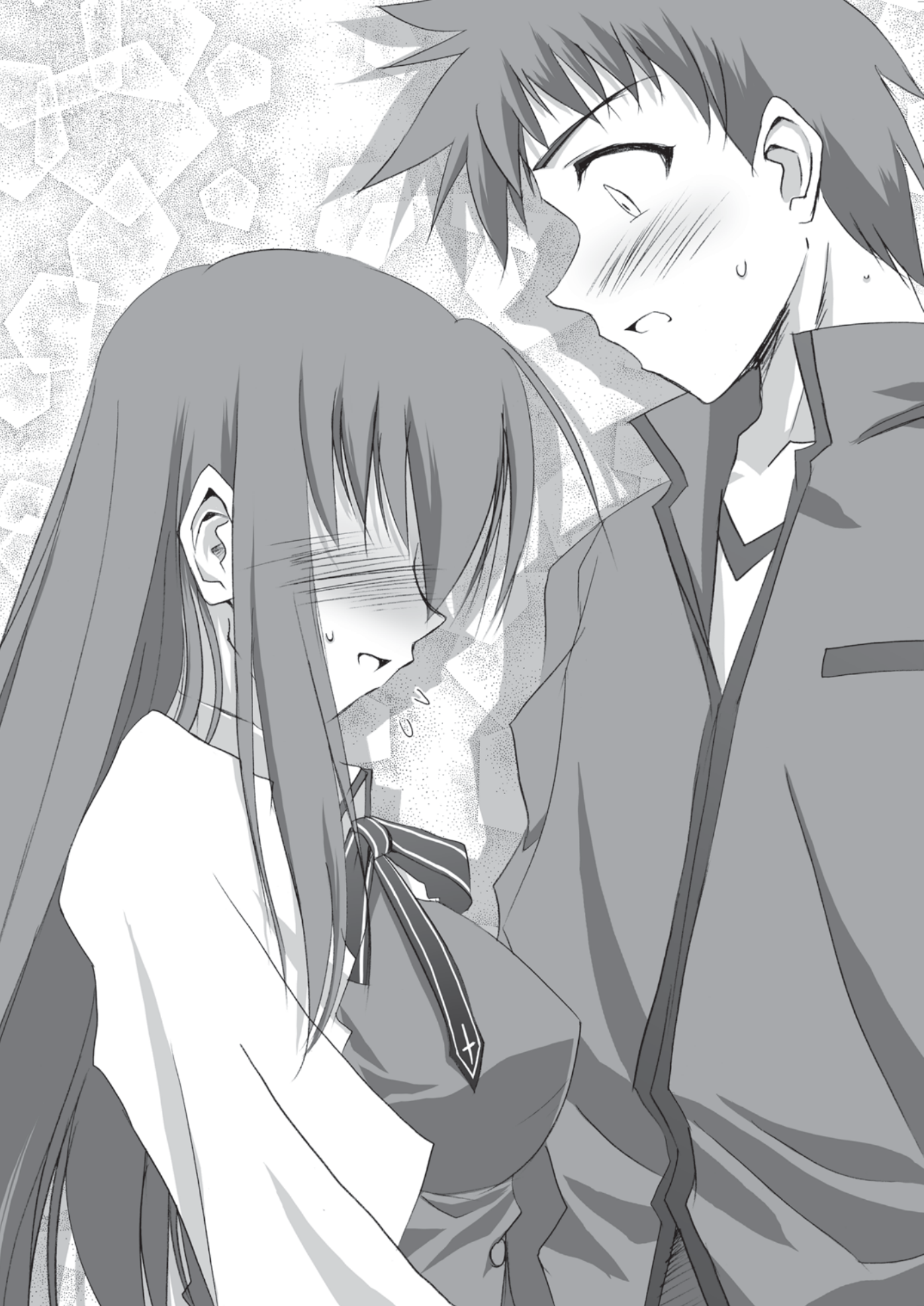
11

つるりと柔らかい肌が唇に触れる、それは絹の布に口づけする様に滑らかで。
目を閉じてただ、桜の肌に口を触れてその感触を、感情を、伝わる力と思いに知る。こうしていると、落ち着く——出来ることなら、桜に触れ続けて離れたくない。
「先輩……私も、先輩が一緒にいてくれるなら……なにも要りません……から」
囁く言葉が近い。
髪のいい香りがする。それは強く五感を包み込み、唇に触れる手の甲が動いた。
唇は僅かに浮き、そして——もっと柔らかい、融けるような柔らかいものに触れる。
「せん……ぱい……すき……」
至近距離で囁かれる言葉は、耳ではなく俺の口の中に聞こえる。
好き、という言葉はどんな毒よりも癒し、薬よりも蝕む。口蓋を甘く伝い、喉を塞ぎ、俺を窒息させながら下っていって燃え立たせる。唇はパニックになりそうなほどに柔らかさに酔いしれ、頸椎が外れてがくがくするほどに感じる。
——キスしていた。
掌を握り合わせ、目を閉じて。ただお互いの全身全霊を唇に注いで。
絡む指の感触、触れあいそうな肩、前髪の触れた柔らかさ、それよりも何よりもな、口移しされる桜の息が香しい。
「俺……桜……好きだから……あ」
桜の口にも注ぎ返す。好きだ、その言葉を桜の唇の中に、飲ませる様に。
それが強い酒精の様に、ひくんと桜をの身体をふるわせる。一言の度に、体温が一度上がっていくみたいな。俺も骨が染みるほどに熱くなっていいて。
ふちゃり、と唇が小さく水音を立てる。
それは淫らなのではなく、どうしても抑えきれない俺たちの心の波立ちみたいで、清らかに感じる。お互いに舌を伸ばすのも肉欲を貪るためじゃなくて、こうして——唇だけで触れ合ってるのが足りないから。
「せん……ぱい……あ……ん……」
「桜……さ……あ……は……」
握り合わせた指が、絡んで離れない。
これを離してしまうことは許されない。離せば桜との口づけが終わってしまう、そんな気がして止まない。だから、桜を逃がさないために俺は——
「あ——」
畳の上に、桜を押し倒した。
柔らかな体が、畳の上に弾む様だった。桜を両手を畳に押しつけ、被さる。
乱暴な仕草だったが、煮え立っている俺の身体は易しく丁寧になんか出来ない。
桜に口づけしたまま、下にある桜の柔らかさを、こんなに感じて——全身の神経が、あまりにも感じすぎて駄目になるんじゃないかと思うほどに。
柔らかくて、気持ちいい。胸の間で形を変える乳房も、組み敷いて絡める足も。
もう、桜のこと以外考えられない。俺の中に欲情が滾りそうになる、どうしようもなく硬く血液が固まり、強張り、我慢できなくなる——
「は……あ、先輩……ここで……しても、いいんですよ……」
優しく誘う桜の声。
その声に溺れて、声が耳朶を溶かし、欲望が理性を溶かすままに飛び込みたい。
唇を溶け合わせて、胸元を開いて柔らかな乳房を貪り、スカートをめくり下着を剥ぎ取って熱い欲情を桜のどろどろの中に突き立て、狂った様に腰を動かして果てたい。
「……どこでも……いいんです、私、先輩にしてもらえるなら、嬉しい……から……」
どうしてこんなに、桜は俺を喜ばせるのか。
頭がおかしくなって、衛宮士郎という袋の中に煮え立った血液とどろりとした欲望しかない存在になった気がする。こんなことを考えてるのは心でも頭でもなく、脊椎の下の方が勝手に俺自身になっている——
……どこでもいいから
俺は桜が欲しい。

……嬉しいから
桜がこんなの欲しいのは、俺は桜にどうしても……
しゅんしゅんと、お湯が沸く音がする。
忘れても良い、そんなことは、そんなことは今は沸き立つように熱くなってる俺が――
「あ……？？」
――待て、と
組み敷いた格好のままで、顔を上げる。ひどく重要なことを、忘れていた気がする。
桜との愛に溺れることは何よりも悪くないけど、今はそうするより先に、気が付かないといけないことが、あるんじゃないかと。
なんで、こんな、掛けっぱなしのやかんみたいな危険な音がするんだ――
「先輩……あの、どうしたんですか？」
「……だめだ、やっぱり壊れてる」
「こわれて、あの、私は大丈夫ですけど……？」
桜は融けた瞳で、俺を見上げている。
でも、無粋なことに俺は桜よりもたいへんなそれに気が付いていた。このまま桜とその、えっちなことをしていると、駄目だと。
「きゃ！　……先輩！」
「うー、あちちち！」
慌てて起きると、ポケットからハンカチを出して茶釜の蓋を掴んでずらす。
むわあああああー！と激しく蒸気が上がって火傷しそうになるが、キッチン慣れした俺には大したことはない。酒気を飛ばす方がもっと火が立って大変だ。
「くっそ、今度は切れないのか、このままだと空焚きに――！」
「先輩、これを！」
「おう！」
はっしと渡される、水入れ。
蓋の外れてなみなみと注がれたその水入れの水を、どどーっと茶釜の中に注ぐ。
ぼふぶふふふ、と湯気があがる。そして茶釜は鎮まって、茶室の中には立ちこめた湯気が――
横では桜がしゃがみ込んで、はぁはぁと肩で息している。
ナイスだ桜、すぐに水を注げば茶釜も無事だ……って、治したつもりだけど今度はヒーターが切れなかったとは、不覚。
俺も咄嗟のことで、中腰をどすんと下ろす。
さっきまで桜と抱き合ってキスしていたなんてコトが、一瞬吹き飛んでしまう――お互いに顔を見合わせると、どうしてか、おかしかった。
「あ……あはは、先輩……すごいびっくりしてましたよ……あは」
「いや、はは、だってこんな事になるって……」
邪魔されて悔しいんじゃなくて、こんなことに気が付かないほど夢中だったのがおかしいのか、恥ずかしいのか。
風炉のスイッチを切って、難は逃れた。桜が口元を抑えて笑っている様子が、眩しくて和やかで、俺も可笑しくて弾む様に笑う。
「参ったな……やっぱりバイメタルが本格的にイカれるな。こりゃ取り替えないと駄目だ」
「……どうします？　先輩。修理を続けます？」
「あー……うーむ、どうするかな。パーツがないと騙し騙し使うことになるからな。とりあえずこのお湯をどうにかして、後でやり直しにするしかない」
無理に頑張って何とかなる気もするけど、きっと長持ちはしない。
ならば茶道部の人には悪いけど後日まき直しでやるしかない。
それに――やっぱりその、他人の部室でえっちするのは、ルール違反の気が。
「そうですね……でも……ちょっと残念だったかなぁ」
「あ……上手く直ってたら、あのまま出来たのに……済まない、桜」

ぱん、と手を合わせて謝る。
桜は慌てて手を振って、そんな先輩が謝ることは何もありません、と早口でまくし立てる。落ち着きない桜だったけど、やおら赤面して、しゅんと肩を落とす。
――その様が、今までにないくらい色っぽくてそそる。
まだ体の芯が煮えたままで、桜を見ると骨から肉にその興奮がすぐに伝わって――喉が詰まって言葉がでなくて、もう一度桜を抱けば収まるのかと……
「う……その、帰ったらまた、その、ゆっくりと……したいし……」
「先輩……その……ま、まだ修理するところ、あるんですよね」
桜が赤面しながら、訊ねてくる。
何を言ってるのかよく分からない。修理するってもうこの風炉は手詰まりだし、無理しても直らないコトには変わりない――いや、ちがう、思い出せ。
桜とここにくる前に、なにかこう……
「……ああ、そうだ。たしかその、お手洗いが……」
思い出して頷く。女子トイレが故障気味だとか何とか。
でもそこを治そうかと聞いたら桜が怒り出したから、それは忘れてたんだ。
でもどうしてそんなことを、もう一度桜が言い出したのか？
「……」
こくんこくん、と桜が頷く。
頬が赤く、前髪に瞳が隠れているけども、その様が色っぽくて――こっちの体温まで熱くなりそうだ。どうして桜の仕草に、こんなに期待してしまうんだろう。
桜の心拍高いのか、俺の心拍が高いのか。
口にする言葉が、奇妙なほど、臆病に震える。
「いや、でもあれは用務員か業者を呼んでするのが……」
「その……治しませんか？　先輩？」
「え？　……いや、だって、その」
桜が駄目だっていったんじゃ――だけど、そんなことは言えない。
上がった桜の瞳が、俺を求めていたから。
「あそこなら……その、放課後に人が来ませんから……大丈夫です」
「……桜、それって」
「はい……その、家まで我慢できません、先輩……さっきキスされちゃって、わたしすごく……だから、私を助けると思って、あそこで……」
ふるふる、と小さく震える桜。
それはあまりにも魅惑的すぎて、俺の理性がどろり、と歪んで墜ちるのがわかった。
それが罪ではなく、幸福の一つの形なんだと。俺は桜のためにあり、桜も俺のためにあるんだとしたら――
「……ほんのちょと、我慢できるか？　桜」
「はい……できます、だから……ちゃんと最後まで、今度はしてください……先輩」
「……分かった、桜。じゃ、これ片付けたら……ん」
「……好きです、ん……先輩……」
《ｆｉｎ》

16



桜にさせてみたいプレイ

絵と妄想：いちめどー

望む事・望まれる事

阿羅本 景
イラスト 火星田レイ子

「あー……」

手に持った工具箱の重さを、ふっと感じなくなった。中にソケットレンチ一式と電動工具まで入っていて重くなるばっかりで、持ってると傾きそうになる工具箱だった。でも、目の前に彼女が居て、びっくりしたように俺を見ているとこんな重さに傾いているのが恥ずかしく、腕が上がる。

こんなフラフラしているのを見られたくない。だからこれはそんなに重くないと身体が思いこんでしまう。そうすれば現金な物で、俺の腕は力を振るってずしゃ、とこの工具箱を持ち上げた。うん、軽い軽い……軽い、筈。

「お、重くないんですか？せんぱ……いや、衛宮さん」

「……そりゃ見ての通り軽くはないけどな、桜」

放課後の廊下で、俺は工具箱片手で、桜は鞄を持って。俺が生徒会室にこれを返しに行く途中で、桜は下駄箱に向かう途中でばったり遭遇と言うところだろう。桜の目の前だったらこの工具箱をかるがると持って歩く事が出来そうだけど、視界から外れた瞬間に一気に反動が出そうだった。

目の前の桜は、心配そうに俺を見つめている。まだ日は傾く前で、日差しは白い。中庭越しに吹奏楽部が練習しているふぎゃがー、という不協和音の喧噪が聞こえていた。全く平和で平穏な、この穂群原学園の放課後。

ふぁ、と陽が高いのに欠伸が出て来そうな安穏さ。ぬくぬくとぬるま湯みたいな日々――悪くはない、風呂に浸って居眠りできそうな暖かさが一番だった。それに、桜が居てくれるなら。

傍らを下級生が通り過ぎていく。軽い会釈があった……俺じゃなくて桜の方の知り合いか。俺と桜じゃ有名人の度合い、というか質が違うし。

「んじゃ、桜。今日の夕食は俺だったなぁ……ライダーも藤ねえも満足の旬のネタを考えておくよ。じゃ」

がしゃガシャと音を立てながら俺は桜の脇を通り過ぎようとした。

半時間ばかり埃まみれの照明機器と格闘したから、汗と油で俺はひどい匂いを立てていた。だから桜のほんのりと甘い乳のような薫りから逃げ、その匂いを移さないように、と思って……いたけども、桜の手がぎゅっと、工具箱の取っ手を掴む。

え？と俺は桜の顔を見る。桜は怒ったような瞳で俺を見据える。

「もう、衛宮先輩！そんなに一人で無理しないでください」

「な？無理でもなんでもないよ桜、だってこれいつも使ってる……」

横に桜が立ち、俺の指に絡めるように工具箱の握りを掴んでくる。指にぎゅ、と柔らかい桜の感触を感じた。肩が触れそうで、桜の甘い香りがふわ、と俺まで漂ってくる。学校の中で、廊下でこんな手を握りあっている――いきなり頭の中が沸き立つ。

ぱっと手を離して遠ざかりたかったけども、そうするとこのくそ重い工具箱を落としてしまう。桜にぶつかったら事だし、桜だけに持たせる訳にもいかない。そうなると俺はこれをしっかりと握りしめ、間近の桜に――

「そこの生徒会室に戻しに行くだけだから、大丈夫だって」

「嘘です！衛宮先輩さっきからフラフラしてました、私見てましたから」

桜の声色が強くなると、逆に俺はおろおろと周囲を見回す。今幸いこの廊下に誰もいない、よかった……誰か居たらどんなに恥ずかしい思いをするか。

桜はぷ、と頬をふくらませている。それは可愛らしく、指でつんと頬をつつきたくなる……だめだ、今でさえこんなのなのに、さらにそんなじゃれ合いをしたら……

というか、桜――

19

「いや、その桜、さっきから衛宮先輩というのはその……」
「あ……ご、ごめんなさいっ！」
桜がかっと頬を赤らめて俯く。確かに前は先輩だったけど、今は同級生だった。そういうのは仕方ないとは思うんだけど、せめて学校ではあまり先輩と呼んで欲しくはないと思っていた。桜には難しいかも知れないけど、せめて衛宮さんと呼んで、と。
「……いや、済まない。こっちこそ……で」
でも、桜の手はしっかと俺の手と、工具箱を握ったまま離さなかった。
……すごく、ぎゅーっと握ってくる。これは絶対離さない、という意思表示――なんだろう。
「桜、その……まだこれ握ったままなんだけど」
「だから、せ……衛宮さんと一緒に持っていきます。すぐそこですよね？だから一緒に……」
……桜が顔を上げる。良い考えだと思いませんか？とその瞳が問いかけてくる。
いや、一緒にっていうのは……すごく魅惑的だけど困ってしまう提案だった。誰かに見られたらあとでなんと言われるか、と思うしそれに、こんなに間近で桜を感じると……
「あ、う……」
制服姿だけども、桜の身体は俺の骨に染みるほどの魅惑を感じさせる。満開の花の輝きと芳りというのか、とにかく目に、手に、花に、肌に感じる全てが桜の魅力と、俺が居ても立っても居られなくなるような、このまま花を咲き誇らせておいたら悪い虫が付きそうな不安というか、そんな居たたまれない欲望を覚える。
そんな桜と手を握り合わせて、学校にいる。
手の感覚は鋭敏になって、腕が感じる工具箱の重さはただ筋と筋を引き延ばすテンションにしか感じない。指の甲に触り、握りしめる桜の指。それは柔らかで、それで居て俺が逃げることを恐れるようにしっかりと……
「だめ、ですか？……」
覗き込んでくる、微かに潤んだ桜の瞳。
じわ、と黒目がちの瞳と長い睫が滲む。そんなお願いする顔を桜にされれば、曲解してなんでも許して何でも欲しくなりそうになる。心臓がばくんと脈打ち、そんな身体を裏腹に俺の脳みそが走りそうになる身体を押さえ込む。
ここは学校で、廊下で、そんな家の中みたいにどこでも盛る訳にはいかないんだぞ……
「あ、ああ、うぅん、わかったいい、じゃぁ生徒会室まで」
声が裏返り掛けていて、声が口じゃなくて後頭部で出ている気がする。
息がしづらく、側に桜がいると逆に苦しくすら感じる。桜が綻ぶように笑うのも、悦ばしいけども逆に痛い。こんな、桜に笑われる快感も身体で感じるというのは……昔の俺から想像できないほどに、駄目になってしまったみたいだった。
俺と桜が並んで歩き出す。間には工具箱。
がっしゃがっしゃ、と歩調に合わせて中身の金属が触れあう音がする。
「……あ、こうしてると、まるで運動会で二人三脚してるみたいだって思いませんか？」
桜が横から語りかけてくる。出来るだけそっちを見ないようにしているから、声を掛けられると正直つらい。何拍か遅れて頭の中で桜の言葉を考える。
……確かにそんな風だった。歩幅が違う俺が桜の歩調に出来るだけ合わせようとするから余計に。
「確かにね……ああ、でも苦手だったな俺、そういうの」
「そうなんですか？」
「あーなんだ、昔は人に合わせるのが得意じゃなかったから。いちにーいちにーがにーいいちにーいちに勝手に変わってやたら転けた気がする」
思い出して語るのもどうも恥ずかしい。協調性の低い、というか時には協調性が無く我を通すこの衛宮士郎が足を結びつけて一緒に走る、なんてまるっきり冗談にしか思えなかった。通知票に衛宮君はもうちょっと友達の話を聞いて一緒に仲良くしましょう、と書かれてオヤジが苦笑してたのを思い出す。
桜の顔色を窺うと、くすっと小さく笑っている。それは無謀なお子様だった俺を小馬鹿にしているんじゃなくて、すごく納得したような仕草だった。そんな風に笑われると――正直照れる。
顔をまた背けて、目で生徒会室の表札を探る。もうちょっと先だ。

「確かに衛宮さん、そんな感じがします。でも、それもすごく……衛宮さんらしい、です」
「……でもな桜、短距離とかは速かったんだぞ？一応クラスの代表だと200M走だったけど、いやなぜかそれでも花形スウェーデンリレーには選ばれなかった……ああ、そうか、やっぱりか」

思い出した、俺、バトンタッチどうやってもタイミング合わなかったから……
またしても墓穴を掘った俺。ああ、愚かな。

横から忍び笑いを漏らす桜。赤いリボンが笑いに揺れる。
それに俺はどんな顔をすればいいんだろうか？顔を直に見ると、またむらっと情欲に揺られる気がする。桜と一緒に歩いているだけじゃなくて、工具箱が挟まってたけど一緒に手を握っていて、その温かさと桜の感触が常に身体に伝わってきて。

「桜は……って、ああ着いちゃった」

運動会はどうだった？と聞こうとした矢先、目の前に生徒会室のドアがあった。
ここにに到着するとやっと桜が手を離してくれると安堵を覚えるのが半分、それを惜しいと思うのと話を聞き損ねたと思うのが半分……いや、話は中で続けられるか。

桜の指が離れる。二人並んでは流石にこの扉は潜れない。
その瞬間、甦った1Gの重力が俺の肩を10Kg強の力で引き下げる――

「ぐっ……いや、大丈夫だから桜」

背後で傾いた俺を心配そう見つめる桜を感じていた。大丈夫と良いながらこの塩梅は情けないけど、平気を装ってポケットの中から鍵を取り出す。
片手で空け、中に入る。昔からだけど生徒会室には居残りは居ない。

「桜？時間があれば中にどうだ？お茶ぐらいはあるから」
「あ……はい、よろこんで」

その答えを聞いて、心が躍る。二人っきりで一緒になれることが、純粋に嬉しい。
いつもその機会は少なくなかったけども、この学校で水入らずというのは貴重な体験だった。桜と一緒にいるのを誰かに見られるのがまずい訳じゃないけども、どうしても気になる……桜が綺麗すぎて、みんなが桜を見ているような気がして。
自意識過剰なのかも知れないけど、こればっかりはどうにもならない。

俺の後に桜が続く。失礼します、と礼儀正しく礼をする桜、でも俺以外にそれを聞く人間がいない。
桜が扉を閉めていた。俺はいつものロッカーに近づくと、ドアを開けて中に置く。後ろから興味深そうに桜が覗いているのを感じる……

「あー、なんだ、三年以上これを使ってるといろいろ貯まるもんでな、桜」

振り返って桜にそんな説明をする。このロッカーの中はというと、工具と余剰パーツの山でまるで機械工の備品置き場みたいな有様だった。おまけに埃と油で黒くなったつなぎとエプロンとか、配線工事に使うワイヤーとか、車の予備ジャッキとかとりあえず便利そうだと思った物を片っ端から詰め込んであった。

整理が行き届いてないので桜は汚いから呆れているかな、と思って見ると……

「先輩……」

瞳が柔らかい。軽く首を傾げて俺を眺める視線は、胸に抱くようで。
まるで母親が子供のおもちゃ箱をみるような視線、と言えばいいんだろうか？ぐちゃぐちゃと散らかっているけど、そこに俺の全てが詰まっていて、それを愛おしく思っているみたいな。

嬉しいとも、恥ずかしいとも、一気にそんな胸の奥に染みる感情。
ただ、中をずっと覗かれていると、俺の心の中を覗かれているみたいな気がしてくる。ロッカーのドアを締め、扉に背中を預ける。

「……まだ、校内の修繕のお手伝い、つづけてるんですよね？衛宮先輩」

誰もいないので、俺を呼ぶ名前に先輩が着いている。それを注意しようと声を上げかけたが――止めておいた。なんとなく、今は衛宮先輩、と言われる方が正しいような気がするから。
指でこつこつ、とロッカーの扉を叩く。薄いスチールのロッカーはそれでも大きくこぉんこぉん、と響いて音を立てた。

21

「んー、まだいろいろ頼まれててね。一成の奴が卒業しちまったから義理はないんだけど、だからと言ってもう止めました、というのも人情がない……だからいろいろ続けてると」

結局留年してしまったために、そんなことになってしまった。遠坂は卒業後はイギリス留学で魔術の道を究めるらしいし、一成は仏教系の大学に行ったとか。俺と桜はまだ残っている……微かに寂しさは覚えるけども、それに泣く程の物はない。

はは、と笑う。どこかその笑いが軽く、空虚な響きを帯びる。

何故かは分からないけども、その笑いがひどく俺の気に触る。笑わなくて良いところで無理に笑い、空気が動かない苛立ちを覚えるようで。

唇を噛んで、桜を見る。校庭向きのこの部屋に太陽が差し込み、窓枠が会議机の上に模様を描く。その向こうで、背に光を受けた桜が立って俺を見つめている。

桜が、この部屋に共にいた。

それは、そこからふわりと香が漂ってくるような。でも、机越しのそれは遠くて、手を伸ばしても届かない気がする。何を俺が戸惑っているのか、分からない。桜と二人っきりなのに、俺がは煮えきれないこの雰囲気を、いや俺自身を許せないような。

――桜は笑っていない。でも、真剣に俺を見ている。

だから、俺の言葉で最後まで説明しなければいけない気がした。

説明なのか、弁明なのか、愚痴なのか、内心の吐露なのか――

「……おかしいかな?桜。俺は桜の味方で、桜のためだけに役に立たなくちゃこの身体と命を保った意味はないのかもしれない。でも、昔の名残を振り切れない、振り切ると桜が好きだった俺じゃ、衛宮士郎じゃなくなってしまう気がするから」

……矛盾だ、と言いたいのだろうか?正義の味方ではないのに、その真似事を止められないと。端的に、割り切って、厳密に言い下せばそうなる。でもそうだ、と俺の口からは言えなかった。

言えないから、こんな回りくどい言い方になる。

額と前髪を掻く。髪を指で梳き、その俺の迷いを汗に変えてこの頭の中から発散したい、そう思うのか。口がまだ動き、桜に言葉を向ける。

「だから――桜が止めて欲しいって思ってるのなら、桜だけに俺は尽くす。そういつも思っているんだけど……」

だけど、なになのか?答えもないのにそこで躊躇いを見せるな、俺――

桜が好きなんだろう、だから全部投げ出した、全部捨てた、彼女に剣を突き立てた、その為に命も身体もいらないと誓った。理想を信じながら嗤うあの腕を従え、理念を信じながら狂うあの男と戦った。そして――だから、なのに、なぜ俺は。

目を閉じる。後頭部をロッカーに預け、痛む頭の表面を撫でた。

突然、考え過ぎなのだ俺は。桜はそんなこと聞きたいはずじゃないのにいきなり深入りしすぎている。手に残る、桜の指の柔らかさ。彼女の薫り、それを感じたから、それを感じ続けるために俺は俺の決心を吐露しないといけない、そんな迷いに駆られたからか。

――馬鹿だった。話題を変えないといけない……

顔を上げて、桜に話しかける――いや、話しかけたつもりだった

「なぁ桜……あっ!」

唇を塞がれる。キスされ、身体をロッカーに押しつけられる。

「う――あ」

桜の身体とロッカーの間に挟まれる。一体いつの間に桜が俺の側までやってきたのか分からなかった。桜の身体はボリュームがあって、俺の胸に柔らかくぎゅっと圧迫される。それよりも、この唇を塞ぐ桜――

桜の顔で、視界は塞がれていた。息も口が塞がれていて出来ない。

いや、それよりも俺の口伝いに桜の息が流れ込んでくる。唇から吐かれる息は温かく、湿っていて、そして桜の味がした。息なのにこんなにどろりと粘った感じがするのは何故なのか。目を見開いても見えるのは桜の閉じた目蓋だけ、鼻がぶつかって、俺はキスしているんじゃなくてただ桜に唇を押さえつけられ、襲われている様だった。

桜の手が俺の腕を押さえる。抵抗を奪う気なのか、無意識の動きなのか。
背中を押し当ててているロッカーがべこべこと凹むみたいで脆弱に感じる。桜の質量というか、被さってくる力に押されて後ろに倒れ込んでしまいそうな気がしていた。いや、それは錯覚なのに、そんな風に感じるほどに桜が俺を求める力は強かった。
たわわな胸。制服越しに俺の胸板に当たる。まるで柔らかなゼリーの固まりを俺と桜の間で挟んでいるような気がする。制服姿でもあの胸は存在を主張しているのに、今は俺の胸に触ってぐにゃり、と形を変えていた。

「あ……ん……」

桜が唇から声を漏らす。瞳は閉じたまま、感に堪えかねた吐息のような声。
桜の濡れた唇から、舌が這い伸びてくる。唇を割り、ぬるっと熱く濡れた舌が触れるとまるで口の中を犯されるような感じがする。
でも、俺の背後はロッカーで、逃げることは出来ない。頭がちょっと動き、角度をずらしてより桜は俺の口を犯してくる。

「んっ、ん……ああ……」

身体が硬直する。生徒会室で、学校の中で、突然桜に襲われるようにキスされる。そして抵抗できないまま、何故そんなことをするのかも分からないまま、俺の口は桜の舌に蹂躙された。鼻から荒い息を吐くけど、そんなこと気にしないみたいに桜の顔はもっと俺に寄ってきて、首が曲がる。桜の舌が前歯を触れ、俺の舌を求めてより一層――
桜は俺の手をぎゅっと掴む、そして、胸が俺の身体でぶるんと擦りつけられる。
足まで絡んで、俺の股間に桜の膝が触っていた。逆にそれは俺の膝も桜の足に割り込んでいて、それをぎゅっと足で挟まれた。
舌を舌で触れ返す。でも、逆に桜の舌がぬるっとからみつき、俺は食られるような気がする。それは俺の口の中に流れ込む桜の唾が甘くて、唇が痺れてはしたなく漏らしそうになる。舌は口腔で戦慄き、責められるのを待つ。
まるで百戦錬磨のジゴロの舌技に翻弄される少女の小娘のように、俺は桜の舌に震えるばかりだった。それに、桜の身体はしなやかで満ちていて、どうしようもないほど魅惑的だった。鼻にはもう桜の香りに満ちて、石鹸と肌と不思議な香料の薫りが鼻の奥まで染みつく。
これが一番効いていて、頭が何も考えられなくなるほどに……

「あ……」

桜がやっと、唇を離してくれた。絡み合った粘膜、つう、と唾液が残って濡れていた。
俺は桜にロッカーに押しつけられたままなのは変わらなかった。顔が離れ、ようやく桜がどんな顔をしているのかが分かる――でも、目は前髪に隠れて見えない。
それなのに、唇だけは鮮明に見える。さっきまで俺の唇を塞いでいたそれについ見入ってしまう――と、赤い舌がぺろり、と拭うように舐めた。
それは、ぞくっとするほど淫蕩な光景であった。
食べられてしまう、桜に舌なめずりされ、その前髪に隠れた瞳にはきっと俺の美味なることに酔いしれ、さらに汁と肉を求めて期待に溶けているんだろう。このまま桜が唇を触れれば俺はその舌で内側から溶かされ、こそげ取られてしまう、そんな妄想を抱くほどに、桜の唇に見せられていた。
頭が痺れる。何でこんなふうになったのか、桜が何故そうするのかが分からない。
分からない方が幸せなのかも、とこの口の中の唾液を飲むと思ってしまった。手は桜に握られ、膝がぐり、と俺の股間を触れる。それにああ、と声を上げそうになる。
まるで女の子のように――みっともない、けども押さえれない。

「先輩……私、先輩を困らせてますか？」

桜は俯き気味のまま、そんな言葉を掛けてくる。
瞳が見えない。それが不安でいけない、桜がじっと俺を見てくれればいくらでも、なんでも出来る気がした。でも前髪に隠れてしまった瞳は一体何がどう起こっているのか、俺の自信がなくなる。
桜がこんな風になることは、昔はあった。最近は無かったので忘れていたけど、どうしようかと――でも、顔を掴んで上げられなかった。手が、今ロッカーの上で動かない。
動きの悪い声帯を震わせ、桜を安心させようと答える。

「桜が俺を困らせてなんか無い。俺が困るのは俺の勝手さであって、桜は何も悪くない」

「……」

23

ぐ、と喉が声を上げそうになる。桜が手首を掴む力が強い。
女の子の握力だからたかが知れているんだけども、俺の身体は桜に直接触れるとその力をどうしても影響される。今桜の手からはやり所のない力が貯まり、それが漏れ出て俺に伝わってくる。
いや、桜自体が、まるで堤が切れそうなダムみたいだった。
暴れれば桜を振り払うことはできそうだったけど、この決壊寸前の力の水量の莫大な圧迫感が俺を動けなくさせているんだ。これはあたかも蟬が入った巨大ダムを前にして逃げなきゃいけないのに、足が竦んで動けなくなるかのようだった。どれだけ走って逃げても決壊した水量の前ではどこにも逃げられない、そんな絶望が動くことを諦めさせるような。
――そんな不吉な連想をしちゃいけないのに、桜の沈黙が俺を掻き立てる。
それを振り払い、足が動け、声よ彼女に届けと俺が叫ぶ。
「桜！俺は桜の味方だ。俺は馬鹿で、桜の味方しかできないんだ、だから……先らが俺を困らせることなんか無いし、俺がこんな風に桜の悩みになっちゃいけないんだ。ああ、もっと俺が……」
俺がどうなれば、桜に幸せになれるんだろうか。
だけど、それを考える暇も、言う時間もなかった。再び桜が襲いかかるように俺に――
「んんっ！」
舌が、唇が、胸が、足が俺を責める。
口腔に這うなま暖かい舌は俺の舌を溶かしそうで、唇がくちゃりくちゃりと吸う。足はまるでもみ合うようで、がんがんと何度が激しくロッカーの扉に悲鳴を上げさせる。俺の股間はこんな襲われていても興奮して硬くなって、それに俺の膝が当たる桜の足の付け根もじんわり温かく溶けてきている気がする。腰が、悶えるように震える。
「ん……んあぁ……ああ……」
桜の手が、俺の右手を持ち上げる。
抵抗する気はないけども、動きはぎこちない。そのまま腕を上げて、桜の手が俺の掌を……
桜のふにゅりと挟まっている胸に押しつける。制服のサージの目の細かい手触り、その向こうにブラウスと、その下のブラジャーのすこし違った布の感触がある。でもそれは些細なことで。
指が埋まりそうな、柔和な桜の乳房。掌と指に感じる、確かな偽りようのないボリューム。
触れているだけで掌が熱で歪みそうになるのに、桜はぐっと、もっと胸の芯を触ってくれって言いたいみたいに強く、痛くなりそうに押し当ててくる。
頭がぼーっとなる。
立ってロッカーに押さえつけられているんじゃなくて、薄い鉄板の上に俺が横たえられ、上から桜が被さってきている気がする。そんなになるほどに桜に酔っていて、桜の味と、桜の香りと、桜の感触と熱さと湿り気が俺を塗りつぶす。
貪婪な唇が、俺をようやく解放してくれる。
二人とも顎まで唾液にぬらして――でも、桜は顔を寄せ、俺の顎をぺろぺろと舐め取ってくる。先輩を汚しちゃったから、私が舌で綺麗にします……そんな無言の台詞を感じそうなほどの優しさと、足を取られそうな想いの深さ――
「あ……桜、そこまで……しなくても」
「したいんです、させてください、先輩……だって、先輩が私のために尽くしてくれるのに、私は先輩になにもできないから……先輩に迷惑を掛けるばっかりで、今も先輩を困らせて……」
また瞳は見えない。桜の声は、ふる、と涙を零れないように堪えているようで。
そんなに哀しませることは何もないのに、どうして桜が哀しむのか、だって――
「そんなことないから！だって俺は桜がいるから生きているみたいなものだろ？だから桜は胸を張っていればいんだよ、俺が……」
「でも、それは先輩が……こんな駄目な私を助けてくれたからです」
頭を振る。違うんだ、桜――駄目じゃない奴なんて居ないんだ。
それを堪えるんじゃなく、許すんじゃなく、理解するんじゃなく――それを愛する事で全てが始まるのに。俺も桜もその前で迷ってしまって、踏み出せない。もどかしい、苦しい、向こう岸が見えているのに足が攣って、喉に冷たく冷酷な水が流れ込み、肺がごぼごぼと気泡を吐き出すみたいに。

24

「……」

唇が戦慄く。意識が先走りすぎて、言葉が出ない。舌を噛み、血が出そうになる。

手は桜の胸に触れ続けていた。ブラの中で苦しげに膨れあがった女性の欲望というか、桜の桜らしい力の漲り様というか、もう――掌の中で弾けそうだった。

桜の顔が、ゆっくりと上がる。俺は桜を見つめる、瞳が泣きそうだ。

前髪が上がる。俺にもたれかかる桜の身体、それは俺の骨で彼女を感じ取って、まるで俺と桜が一つに重ね合わされ、プレスされそうに感じる。

「先輩？私も……先輩のために、何でも出来ます」

嗚呼

桜のひとみ暖かな光を満たして――口元は微笑んでいた。

それは俺が、目だけで絶頂に達してしまいそうになるほど、俺に高揚を覚えさせる。桜は桜で桜であり続け、俺をこんなに愛してくれている。俺の身体が震えるのは、止めていた息を安堵で吐き出しただけじゃない。

「先輩……身体、楽にしてください」

そんな優しい声を聞いた。今まで押さえつけられて、がちがちに緊張していたからか。

桜の膝が離れる。ぬちゃ、と湿り着くような感じがするのは、俺なのか桜の身体なのか。胸を押さえていた手が離れても、こんな大きな桜の胸から手を離すのはどうしても惜しい気がする。

「ああ……桜、俺……」

「はい……感じてます。先輩も私と同じくらいに興奮してるんですね……こんな風に」

わさわさっ

股間に触られた途端に、膝が笑って砕け落ちそうになった。

手が、優しいタッチで俺の玉袋と肉棒を撫でるように撫でた。桜の頭は俺の胸に宛われ桜の髪がふわっと香り、胸が温かくなる。上半身は愛され、下半身は嬲られる。まるで魔術に翻弄されているかのようだった。

ロッカーに手を着く。ぎしり、と鉄板の扉が鳴いた。

息が満足に出来ず、鼻ではっはっと短く吸い、吐く。そのたびに桜の薫りを吸い、身体がどうにもおかしくなってしまいそうだ。それが気持ちよく、俺の鼻に、というか頭蓋骨に響くような刺激だというのが、危険な感じすらする。

「先輩……先輩、楽にしてあげます。私だから出来るんです、こんなこと、も」

桜は学ランの胸に頬を寄せながら、顔を下げていく。胸が、手が、頬が、少しづつ下がっていく。少しづつ桜の香りが薄れてほっとするけども、裏腹に桜の上体が俺の下半身に近づいている。でも俺はロッカーを背中にして呻くばかり。

「なに、桜……そんなことしなくても、俺は……」

「ふふふ、先輩、私に嘘を付いちゃだめです……こんなに硬くして大丈夫な筈がありません」

「うっ――！」

わさり、と股間を撫でられる。指はしなやかで優しく俺に触れるけども、優しいだけにより一層きもちいい。確かにこんなに硬くして、感じていて、大丈夫なはずはない。

だから桜に俺はしてもらいたい……そう、思うことを偽ることは出来ない。

「桜……ああ、お願いだ……から、俺を……」

「はい、先輩……気持ちよくして上げますから……」

桜は顔を上げる。その顔に翳りはなく、そうすることが嬉しくて堪らないという悦びに輝いていた。優しく綺麗な微笑みで、それが俺の身体に縋り付いて、腰に抱きつく桜の顔だって――感じることを信じたく思う。

目の前に、ロッカーと会議机と本棚の没個性な生徒会室が広がっている。慣れ親しんだ部屋ではあるけども、それでも桜にこんな風に抱きつかれると今まで見たことのない不思議な部屋に見えてしまう。学校の中で、俺は何を桜にさせようとしているのか――

それは破廉恥で、恥知らずで、それでいて――魂が迷ってしまいそうなほどに快感に充ち満ちている。

25

「んっ」

桜が口でジッパーをくわえる。そして、じじじじ、と下げていく。口だけで下げる桜の仕草、閉じた瞳と朱の差した頬、匂い立つような奉仕の快感を俺も感じてしまう。股間が開き、その中に桜の指が進む。むわ、と蒸したズボンとトランクスの中に入ってくる桜の指が、くすぐったい。

でも、陰毛をかき分けで陰茎に触れ、つままれると――くすぐったいなんて言ってられない。ぐ、と踵が上がりそうになるこそばゆい気持ちよさ。

「ああ……」

つままれ、引っ張り出される。硬く芯を通したような肉根がズボンの中で窮屈そうにしていたが、桜の指に摘まれ外気を浴びる。見下ろせば桜の顔の前に現れた、グロテスクな男性そのものの姿が目に入る。先端が捲れ、湯気を立てそうなそれが桜に重なると、恥ずかしさを感じて仕舞い込みたくなった。

でも、そんな事は許される筈はなかった。唇が、俺の唇をうばったあの朱紅色の捲れた粘膜が、俺の先っぽを包み込んだ。

「う――ぁっ」

ぬるっと触れる唇、それが亀頭を包み込む。口腔に包み込まれ、舌に沿われる感触……それは何度感じても、恥骨の奥まで痺れるような感覚を覚える。桜の唇は、洗いもしない俺のペニスをくわえ込む、その唇がちゅぷり、と俺の器官と触れて卑猥な音を立てた。

「んふ……ん……ちゅ、先輩の……こんなに硬くしてたんですね……ん……」

唇でくちゅくちゅと弄ばれ、こんな言葉を浴びせかけられる俺。出来ることと言えば、そのまま崩れ落ちないように身体を懸命にロッカーにしがみつかせておくことばかりで、桜の指がしごき、そして唇が触れる快感に必死に耐えていた。

我慢しなきゃいけないことはないんだけど、あまりにも容易く達しては、勿体ない気がして。

「ん……ほら、濡れてます、私の唾で……んちゅ……」

口か吐き出された、まるで茹で上げたソーセージのように湯気を纏い、濡れた俺のペニス。遠坂は口を開け、それを見せつけるように舐める。上目遣いの視線は劣情に輝き、滴る雫をその唇ですする。びくん、とペニスの根っこの筋肉が緊張して、頭をもたげた。

ぬらぬらと舌が這う。桜の舌はまるでカタツムリのようで、俺の軸に張り付きながらその唾液の後を残していく。ぴったりと密着したその粘膜の面がくすぐったく、またかゆいほどに気持ちいい。指が俺の玉袋をたぷたぷと転がす。

指に転がされる睾丸。中にたっぷりと精子を含んでいるその肉の球を桜が愛おしげに撫でる。ここから先輩の精液が出てくるんですね、かわいい……と舌音に紛れて聞こえてくるような気がする。

舌がペニスをなで上げる。裏筋をこそげるように、じゅらりと水っぽい音を立て、しゃぶりながら――頭をロッカーに付けて、沸き上がる快感に耐えた。

桜の指が俺を支える。そして、俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。

「衛宮先輩……きもちい、ですか？」

「もちろん、そんな風にされたら我慢できるわけも……桜も上手いし、もう……」

「よかったです、先輩に喜んで貰って、嬉しいです……ん……」

また桜は俺のペニスを含む。安堵した柔らかな微笑みを見続けていたかったけども、また唇を開いて俺の肉棒を加える。大きく口を開き、血管の浮き出たこの俺の肉棒を舐める桜の顔は、嬉しそうで、そしてこうして足下に跪いて俺に奉仕するその悦びが俺の心を染め上げていく。

「桜……ああ……」

震える手を伸ばし、桜の髪に伸ばす。

動いている桜の頭に触れるのはフェラチオに没入している彼女を邪魔してしまうような気がする。でも、股間だけで触れられるよりも、この手で桜がそこにいることを確かめたかった

指がさらりとした髪に触れ、頭をなでる。その手触りが、胸とかお尻とかの肉感的な部分とはちがう気持ちよさに感じる。

「あ……」

桜が頭を撫でられ、俺の肉棒から口を離して微かに俯く。まるで褒められ慣れない子供が

はにかむみたいで――おずおずと俺を見つめてくる、熱く震える瞳が愛しい。手で撫で、桜を可愛がるようにして……

桜は俺の肉棒に頬摺りをする。俺が桜の頭を撫でるように、桜は俺の股間をそっと優しく触れる。

「先輩……先輩、私なんでも……できます。先輩の精液を口に含んで、ずっと我慢することだって……先輩？」

瞳がもう一度上がる。それは、俺に求めていた。

頭の中に、突然別の本のページをねじ込まれたような混乱。俺が桜を撫でる手をつい止めてしまう。桜の言葉が分からなかった訳じゃない、いや、こうして桜と触れあっているからこそ分からなくて良いところまで分かってしまうのだ。

桜の感情が分かる。なんで、桜がそんな淫らな事を言い出したのか……

「先輩……もし、私が家まで我慢できたら……先輩は私を褒めてくれますか？」

桜の声が懇願の響きを帯びる。そんな、精液を飲みたい、いや飲むどころか口に含んだまま我慢して、家まで耐えるだなんて桜の口から淫らな望みを聞かされるとは予想もできない。それも、俺が彼女に命じるのではなく、彼女がそうさせてくれとお願いする――

分かる。なんで、こんな事を言うのかが。

桜はそうしたいんだ、俺の臭い精液を口に貯め、それの味と匂いを耐えながら、衆目に見つめられ、その試練を耐えて俺に尽くしたいということを。俺が桜のためにしてきたことのように、桜も俺に尽くしたい。それが、こんな淫猥な望みになってしまう――

駄目だ、そんなことを桜にさせられない。俺の中の良心はそう叫ぶ。

そんなことをさせるために、淫らな望みを叶えるために俺は桜を助けたんじゃない。だから、桜は可憐にいて欲しい、そう願い、祈るように美しくあってくれと思う――

「桜……」

「褒めて……その時に、ご褒美をください、私に――」

見えないのに、聞こえないのに、そんなことも俺の妄想なのに。

むっちりとした桜の太股の奥で、濡れたスリットがくちゅりと水音を立て、粘った液体がショーツを濡らすのが分かった。桜の身体と俺の身体が同期してしまって、制服の向こうにある身体がどうなっているのかをそのまま神経に伝えられるみたいで。

こんなに奥を濡らして、桜はお願いしている。桜は欲しがっている。

それは求め尽くそうとする者に然るべき試練が与えられない悲劇だ。桜は無数の苦しみに耐えていた。それを想像できる、なんて言いたくない。ただ、彼女は耐えることを耐えていただけであって、それは己の身を守るためでもなんでもなく、ただ耐えるという命題だけがあって、それに愚直といえるまでに耐え続けてきたのだ。恨むことや呪うことが後からやってきて、まず耐えること。心が砕けるまえに、耐える思惟だけが与えられた、吐き気がするほどの無力さ。

胸の裏側がざらざらと鱗が生えたような不快感。その鱗を逆向きに撫で、肋骨の内側が汚らしく捲れ上がるのを感じるように。ただそれが俺の身体に感じる快感と正反対で、感情と感覚があまりにも違いすぎ、おかしくなりそうだ。

でも、それは一時の、虚ろな過去の影のこと。

だけど、今の桜は――

「桜……桜……」

「はぁ……お願いです、先輩……私にさせて……ん……くださ……い……」

桜が瞳を閉じ、俺のペニスに口付けする。

それはまるでこれがイコンであり、聖なる偶像であり桜は敬虔な信徒のようにそれに口付けされるような。桜の声は喘ぎではなく祈りで、ただひたすらに求めていた。求められるのは彼女を求めている衛宮士郎である、この、神ならざる身の絶望――

「く……あ……」

だが、たとえ彼女が口付けする相手が神の手であったとしても、俺ほどには桜は救えない。それは分かる、分かるからこそ俺は――それがエロティックな行いであったとしても、それに怯えを感じてはいけない。そう、彼女に耐える意味を与えないといけない。

それが出来るのは俺だけだ。俺だけが桜に意味を与えることができる。万物の望みを叶える聖杯とて彼女には意味はなかった。全てを破壊し、全てを作り直す力も意味のない苦痛の

27

リフレインに過ぎない。

そうだ、あの時から俺しか桜を桜にしてやれなかった。

それは俺の傲慢だろうか？一人の女性を支配し、その意味を与える――ある意味究極の陵辱であろう。だが、それがなければなにも、始まらない。その言葉を俺が出せば桜の世界は再び芽吹きはじめる――そんな確信だ。

くしゃり、と桜の髪を撫でる。

「んっ……うう……」

「桜……出すぞ。だから飲まないで我慢しろ……家まで我慢できたら、可愛がってやる……からな」

ぐっと桜の頭を引き寄せる。桜の口を俺の肉棒で犯すように。

桜の身体が、俺の足下でまるでバターの様に柔らかくなる。俺の言葉でそれを命じられ、その悦びに骨が溶けてしまったような、そんな仕草。目蓋が閉じ、唇を開き口腔と舌で俺の肉棒をしゃぶる。

じゅぽじゅぽ、と空気と唾液の混じり合った音が聞こえる。腰がロッカーをぎしぎし唸らせる。リズムが出来、桜の頭が俺の腰の前で動いていた。

「ひゃい……せん、ぱい……私……んんっ、ううんん！んんー」

「はっ、ああ、ああ」

桜の口の中は第三の性器何じゃないかと思うほどに温かく、俺の肉棒に絡みつく。舌の表面を尿道口の敏感なところで擦り、亀頭の先端が口蓋にぶつかって、そのまま喉の奥の空間まで塞ぎそうになる。歯は俺の肉茎を甘噛みし、唇は俺の漏れ出す液体を逃すまいと締め付ける。

股間ががちがちに硬い。玉が上がって、体の中にどくどくと精が満たされているようだ。こんなに桜の口の中に注いだら可哀想なことになりそうだった。でも、そんな苦しくなるほどの精を桜の口の中にぶちまければ、気持ちよく、そしてどんなに耐える彼女が美しく身悶えするのかを――想像してしまう。それは罪の味と、聖なる薫りを放つ。

股間が熱い。皮の中がびちびちに張りつめ、亀頭が桜の口の中で石みたいに硬くなっている。こんなに熱いのを桜の口の中に入れれば、火傷しないのかが不安になるほどに。

「桜……はぁ……んっ、ああ……もうすぐ出る、から……」

「ひゃぁ……ふぁ、ああ、ああ……」

桜の身体がびくんびくんと震える。口の中に俺を含んでいるだけなのに、そんなに何で感じるんだろうかと思うほどに。でも、彼女は嬉しいんだ、嬉しいからそれを表現するのが快感でしかない。そう、分かる――

撫でる手を、ぐっと掴んで寄せるように。

荒々しく桜を引き寄せると、俺は桜の口の中に、舌の上に――

「あああああっ！」

どぴゅり、と放たれる精液。尿道を満ち、腹の奥から噴射するように桜の口の中にたっぷり、と注ぐ。こんなに注いじゃ耐えられない、と思いながらも肛門と大臀筋を何度も収縮させて腰の中の液体を絞り出すようにして、口の中に、しとどに漏らす。

「んっ……ん……んん……」

桜の身体も、同じように痙攣する。俺の足下に縋り付き、びくびくと快感を詰めた柔らかなゼリーの固まりのように震えてた。その口の中に俺の精液が混じれば、そのゼリーに俺の味が染みこみそうなると考えてしまって。

「あ……桜……ああ……」

桜がゆっくりと頭を動かす。唇が締まり、俺の軸から一滴も分泌液を漏らすまいとするように、収縮しながら引き抜かれていく。性器の表面を伝う唇の締め付けが、射精後の俺の官能に響いてくる。

「ん……ん……」

桜が口を噤んで、とうとう俺のペニスを口から離す。

口の中にたまっているんだろう、顎が少し開いている。でも、唇はぴったりと合わせられ

て、中に間違いなく俺の精液を貯めている……飲んで、俺の、を。

そう思っただけで、腰がずるっとロッカーの上から滑りそうだった。実際、膝が立たずにそのままずるずると桜の前に腰を下ろしていく。射精後の快感というよりも、本当にしてしまったという不安を覚える。

床に腰を下ろすと、桜と目線が合う。

どうだろう、桜は――口を閉ざしていたけど、目は喜んでいる。す、と細く笑い、俺に促すみたいに呼びかけてくる。さぁ、先輩……ちゃんと見ていてくださいね、と。

どんな顔を俺がしているのだろうか？恐れ？悦び？不安？それとも……分からない。でも今の桜がどんな誰よりも愛しいのは分かる、この脆い心が割れそうな程に。

§　§

町を歩いているのに、目に映る光景はフィルターを掛けているみたいだった。

耳から聞こえてくる音は、あたかも電話の向こうにから聞こえてくるようだ。

俺は桜と並んで歩いていた。いや、桜を守るように傍らに居て、手を伸ばせばその肩を抱けるくらいの距離で。桜が俯いて歩いているのは、いかにも具合が悪そうにも見える。足取りもふらりと不揃いで頼りない。

そんなことを思っている俺の足だって頼りない。スニーカーでアスファルトを踏んでいる筈なのに、まるで素足で焼けた砂を踏んでいるみたいだった。

――それはそうだった。だって、桜が俺の精液を口に含んだままなのだ。

こんなに可愛い桜に学校でフェラチオをさせ、口に精液を飲ませて連れ回して我慢させる。まるで出来の悪い学園物ポルノみたいな所業であり、それをさせた俺は見下げた鬼畜漢だと罵られても言い返す言葉がない。現実彼女の口の中にある精液は俺のモノだから。

誰かに桜がおかしいんじゃないかと声が掛けられることが怖い。

見つめられ、見とがめられることを恐れてこそこそと歩く。いや、俺と桜がふたりでそんなことをすれば逆に目立ちやすいのかも知れないけど、胸を張って歩ける訳はない。

せめても桜が目立たないように、俺が隠して歩き続ける。路地を回り込んで迂回することも考えたけども、距離の長さは逆に桜に祟る。

「桜……」

何度目になるか分からない声を掛ける。でも、その後になんと言葉を繋げたらいいのか。

まだ我慢できるのか、我慢できないんだったらどこかにいってもいいぞ？というか、辛いんだったら止めてもいいと、いうか。

でも、俺が言い淀むと桜は微笑んで俺を見上げる。口元がぎこちないけども、まだ私は大丈夫です、先輩――と無言で語りかけてくるようで。

「ああ……うん、無理はしなくても……」

小さくそう言ってやるのが、精一杯だった。

鼻だけで息をしているのか、桜は苦しそうだった。俺でも口の中に水を溜めて歩いていたら苦しいし、ましてやそれが異性の体液となれば味も薫りも違和感も苦痛だろう。桜の愛液を口の中に満たし、あの薫りと味を染みこませながら歩くことを考えれば、そんなのは俺でも出来ない。

でも、桜はやっている。

健気に耐え、口の中に俺の臭う樹液を満たしながら――その耐える姿が、桜から匂い立つような被虐の美を醸し出させる。俺の目だけにそう映っているのかも知れないけども、制服姿の桜からゆらりと陽炎が立つような、この色気。

それを感じるのが俺の目だけであって欲しい。

もしこの町の中で、桜の色気に気が付く奴が居たら、それが桜を見ていたら。そんな瞳で桜を見られるだけで俺は嫉妬に狂いそうになるのに、その淫らな手が桜に伸びたらどうするのか。俺は耐えられなく、桜を守る、いや桜を奪わせないために凶器を振るいかねない。そして血にまみれ、桜を腕の中に収めるためには何も惜しまない――ことが、俺を恐怖させる。

「……」

桜がふらつく。まだ道は長いのに。時間が引き延ばされ、帰路は遥か彼方の国境に通じているかと思うほどに遠い。桜と俺は寄り添い、桜の願いを叶えるために一歩、一歩と歩いている。その俺にあるのは限りない快感と恐怖、桜にあるのは――純粋な悦びと意味なのだろうか？

苦しそうな桜の横顔なのに、その瞳はまるでセックスの最中のように甘い。
そんな瞳で桜がふらりと町中を歩いている。信じられない、信じたくない、もし一人で桜が同じ事をさせられていたら、俺は狂うだろう。何を壊し、何を殺し、何を奪ってもそれを我慢なんか出来そうにない。
長い外套で桜を包み隠し、足早に去りたい。
そう思うのに、目の前に――運が悪い、としか言い様がない。
「ああ、桜、それに衛宮じゃないか？久しぶりだな」
からり、と枯れた笑顔で俺たちと遭遇する、美綴綾子。俺と桜には縁の深い弓道部の元部長。同級生だったけど、あっちは大学生で俺たちはまだ卒業していない。さっぱりとしたあいつらしいパンツルックの格好で、ここはやっぱり女性か、と思うトートバックをぶら下げている。
「ああ、美綴……じゃないか。うん」
「……」
こくり、と桜は頭を下げる、出来るのはこれだけだろう、桜には。
俺の挨拶もどうにもぎこちない。一年差が出来てしまったけども美綴と俺は気の置けない友人関係だったのだけど、今はこんな桜が一緒にいるとそれを意識しないでこいつと話すことは出来そうにない。
心臓が胸の中で高く脈打つ。もし美綴にばれてしまったら、そんな考えしか頭に浮かばない。桜はしゃべれないから俺だけでなんとかしなきゃいけないのに、俺は頭の中が混乱していて手早き切りあげる方便が思いつかない。
「ありゃ、カップルでお帰りですか……いやぁ、熱いねぇ衛宮」
囃すように笑う美綴。太い筆で引いたみたいな力強い眉が気色に上がる。
いつもならそんな風に笑われれば俺が怒って桜が恥ずかしがるんだけど、今は俺が口を引き結んで答えに窮し、桜は真っ赤になって俯いて動かない。明らかにおかしい挙措に見えるだろう。
すぅ、はぁ――と桜が鼻で息するその呼吸を耳が感じる。息が落ち着かない――それはそうだ、口の中に液体を含んでいるだけでも厳しいのに、それが俺の……なんだから。
そんな桜が横にいるという事実。分かっているのは俺と桜だけなんだけど、それがくらりと毒の薫りを吸い込んだような目眩を覚えさせてくれる。
「美綴……今日は早いな、サークルとかはいいのか？」
平気な振りをするために、そこはかとなく話題を振る。その間も脈が速く、息が浅い。もしかして桜――と美綴が気が付いたら俺の心臓は止まってしまうだろう。
なんとかして美綴の意識をこっちに惹き付けないといけない。そうしないと……
「うん？弓道部か、分かったんだけどうちの大学は強くないみたいでな。大学に入ったらみんな衛宮みたいな奴らばっかりかと思ったけど、やっぱりお前ほど会得しているやつも居ないよ」
やれやれ残念だ、と美綴が首を振る。大学でも弓道を続けているとは知っていたけども、推薦で体育系の学部や学校に入らなかったので、そういうことになるんだろう。それはそれで美綴らしい悩みでもあった。
でも、足が止まって話し込む体勢になってしまったのがどうにも辛い。ああ美綴、じゃぁ、と話を荒々しく切りあげて逃げたい。
桜がそれに着いてこれるか分からない。美綴が気が付くか、桜が耐えられなくなるか。危うい峰の上にバランスを取っている。声が震えないようにしながら、まだ話が続く。
桜は俯いたままで、すこし――危うい感じがする。
「衛宮もウチの大学に来い。後輩にお前がいれば実に心強いんだけど」
「元同級生相手に言う台詞にしたら寒いな、美綴。それにお前頭良いだろ、あんなの二部だって俺に入れっていうのは無理だって」
「……」
「そうでもないんだけど……間桐も一緒ならなお良いな」
びくり――と全身の毛が逆立った気がした。桜の名前が美綴の口から出て、俺の傍らを覗き込む。桜はそんな美綴を見返せるわけはなく、震えながら俯いている。もし桜に美綴が話しかければ、お終いだ。
桜の身体は震え、具合が悪そうに見える。桜にとっては美綴は心を許せる数少ない先輩な

31

のに、その前で俺の精液を口に含んで我慢している……吐き出せば俺に咎を与えると思っているのか、その耐え方が痛々しい。

「……」

だから俺が息せき切ってまくし立てるしかない。俺は話をするだけなのに、どうにも辛い。背中に汗が伝い、それが肌から疲労を分泌させて肌の上を粘るような気がする。

「だ、そりゃ美綴、桜だったら頭良いからもっと良いとこいけるだろ？」

「それだとあたしがあまり賢くないみたいだな、衛宮。でもお前はそんな愛しい彼女と一緒の大学に行きたいとからぶらぶなキャンパスライフを送りたいとかそういう甲斐性はないのか？」

「そりゃ俺は頭良くないけど……ま、まぁそのその辺はいろいろと考えてるわけで」

話が逸れるようで、逸れない。断ち切るタイミングが見あたらない。

剣の刃の峰を歩いているけども、何時までもそれを歩ける訳じゃない。やがて切っ先に達すれば破滅に向かって落ちる気がする。その切っ先にあるのは桜か、美綴なのか。

美綴はにや、と俺を見て相好を崩す。

でも、俺が不自然すぎるのか、傍らのふっと不安そうに桜を見つめる。

その視線を思いっきり塞いで遮りたかった。でも、それより速屈み込んで美綴が覗き込んでいた。

「……」

「どうした？間桐、さっきから黙っているけど――」

桜の身体が震え上がる。俺にもその恐怖が分かった。

桜から、桜の肌から俺の精液が染みこんでむわりと匂いを立てているような気がする。桜は回りにいる人間を狂わせそうに艶気を帯びた空気を生み出していて、それは俺だけじゃなくとうとう美綴も気が付いてしまったのかと。

心臓の鼓動が止まる。全てが破滅する前に、強引にでも救わないといけない――

「いや、ちょっと具合が悪いらしい。さっきまで保健室で休んでたんだけど、俺が連れ帰ることになって」

「そうなのか？間桐……そうだな、元気になったと聞いたんだけどまだ大変みたいだな。ふむ、どうせならおんぶして帰った方が良いんじゃないのか？衛宮」

嘘をついてしまったが、美綴りには気がついた様子がない。

いや、それにふざけるように美綴はいい、人の悪い笑いが俺に刺さる。

むしろそれで助かった気がした。美綴の注意は俺に逸れていた。馬鹿いえ、と軽くいなすと俺はぎゅっと桜を抱きしめる。腕の中で桜の肩はしっかろ抱きしめられる。身体は熱くて、骨がじんと燃えている。でもその桜の身体は制服の中で熟れ、肌をはちきれそうに実っているのだろう。

俺の胸に頭を寄せる桜。弱々しく、それでいながら俺を誘っている――

もしこれ以上美綴が桜のことを触れるのならば、後のことはどうなったって構わない、奪って逃げることしか頭にない。

「ああもう、妬けるねぇ衛宮も間桐も、そんなにらぶらぶだと……あたしも彼氏つくろうかなぁ、遠坂のやつとの勝負も延期になったし、アイツならプレミアリーグのサッカー選手とか彼氏にして戻ってきそうだしな」

「あ……ああ」

「……」

いつもなら、んなことあるかあの遠坂が、とか美綴おまえ男キライなのにできるのか？とか笑えるのに――

「じゃ、お大事に。後であいつのことを聞かせろよー。間桐先輩って綺麗ですね、とかあたしにはこれくらいしか言わないからな、じゃ！」

美綴が現部長の弟の事を口にすると、しゅたっとバッグを肩に背負って歩き出す。

ぽんぽん、と桜の肩を去り際に叩いたけども、それでもびくん、と桜が身震いをして――腕の中でいっちゃったんじゃないかな、と思ったほどに。

でもそれは意識しすぎる俺だけが感じていたんだろう、美綴は笑って去っていった。

腕の中で桜の力が抜ける。精一杯我慢していたのか、その心の緊張がゆるむと身体まで力を失って――倒れ込みそうな桜を、咄嗟に支える。

「大丈夫か？歩けないならおぶっていくぞ、桜」
「……」
ふるふると首を振る。まだ、口の中に溜めているのが分かった。
熱っぽい、具合の悪そうな顔。手を触れれば額は熱く感じるのかも知れない。でも、瞳はじっと俺を見据えている。

――まだ、我慢できます。だから先輩、出来たら褒めてください

そう目線でお願いされれば、俺には逆らいようがない。その瞳は魔眼のように俺を魅せて止まず、欲望と愛をかき立てる。せめて肩だけでも貸して、桜を連れ帰らないと――
ひくっと桜の肩が震えた。それは、快感なのか苦痛なのか……

§　§

「やっと、ついた」
そんな感慨が口から漏れてしまう。それほどに、この帰路は長かった。
桜を抱きかかえるようにして、ただひたすらにこの門に辿り着くことだけを考えていた。美綴に会うような誤算が新たに重なれば、桜は保たなかったにちがいない。
「……」
桜の足取りはまるで酩酊しているようで、俺が手を離せばそのままくたりと倒れ落ちてしまいそうだった。でも、手の触っている桜の身体は柔らかく溶けるようで、制服の中に熱いバターを満たして居るみたいだった。こうやって手を支えるのを止めると、ずるっと崩れてしまう。
だからなんとか桜を、俺が支えて連れ帰ってきた。
口は噤まれ、中の液体はまだ残っているみたいだった。目が苦しそうに泳ぎ、何度ももういいんだ、と桜に言ってやりたかった。でも、そうすることは桜の、俺のために尽くしたいという心を俺がやめさせてはいけないということを知っているから、出来るはずはない。
こんなのは鬼畜で外道な所業であり、桜をこんな淫蕩な行いで苦しめているのだと思うと心が折れそうになる。でも、それは俺の欲望だけがやった訳じゃない。説明しても分かってくれないかも知れないけども、俺と桜の間では間違いなくこれは、お互いを信じての行いだった。
「さぁ、桜……よくやった」
まるで、長いマラソンを走り終え、最後のゴールをふらふらになって辿り着くランナーのような桜。汗は掻いていないけども、身体からもうどうしようもないくらい淫らな牝の薫りを放っている。目はとろけて俺の家の門を、その向こうの母屋を見つめている。と、ととと、と桜は自分の足に躓躓きそうになりながら、歩く。
支えていた肩を離す。最後だけは桜だけで歩かせてやりたかった。俺だってこんな真似は、たとえ桜の愛液や尿を口に含んでなくても、コーヒーだったとしても我慢できない。それなのに桜はこんな無理をして――
だけど、そんな最後のゴールに、ふっと人影が現れる。
俺は息を飲んだ。桜はその姿を見ていない、それにぶつかるように――危ない、とも叫ぶ声も出ない。まるでトラックが飛び出してきて、それに身体が凍ってしまって警告の声も上げられないような。
「桜？」
長い紫の髪、眼鏡を掛けた神秘的、と言っても良いほどの美貌。
ライダーが竹箒を片手に、門から姿を現す。庭掃除をしていて俺たちの帰宅を感じたのだろうか？ライダーならいいのか？いや、やっぱりライダーでも不味い――
「らっ、ライダー！」
「士郎？どうしたのですか――あ！？」
桜の身体が、門前の鴨居でくら、と崩れる。膝が抜けて重心を支えきれなくなった、ノックダウンするような悪い想像を抑えきれない倒れ方。膝が地面にぶつかり、そのまま頭と身体までぶつかるんじゃないのかと思えるほどの。
俺が手を伸ばす、でも桜には遠い。
でも桜の目の前のライダーが桜の手を掴んだ。鋭敏な動きで、まるで地面に落ちる前に桜

33

の身体を奪い取るような動きだった。さすがはライダー、とそこに彼女が居てくれたことを感謝した。

投げ出された竹箒が、門柱に当たって跳ね返る。

それがコマ送りのように俺の目に映る。こぉん、とスピンした軸が門外と門内のどちらに落ちるかを迷うような動き、その間に桜はライダーに抱き起こされた。竹箒が門内に、倒れる。

「桜？」

首筋に桜の腕が回る。その相手が俺じゃないことに微かな嫉妬を覚えたけど、ライダーならそれはお門違いだ。桜のことを一番知るのは俺よりもひょっとしたらライダーなのかもしれないんだから。は、と安堵の息を吐きかけ、吐きかけた息がいきなり逆噴射する。

でも。

次の瞬間はあまりに長く、鮮烈で、衝撃的で――

「――――――！！」

桜が、ライダーにキスしていた。

首筋に抱きつき、屈んだライダーと桜の顔が合わさる。背中から見ているからもしかしたら見間違いじゃないかと思うけども、間違いない。あれはキスだ、ライダーと桜が唇を合わせている。ひっしと抱きつく桜の姿は切なく可憐で、抱きしめられるライダーが羨ましい。

でも、キス。桜の口の中にはたっぷりと俺の精液が溢れかえっている。

そんなことをしたら間違いなくライダーは……桜の代わりに持っていた鞄と俺の鞄を一緒に取り落としそうになる。だって、それは間違いなく行われるのは口移しの……

「んっ――」

どちらとも分からない、小さな息を漏らす声。

桜だろうか、ライダーだろうか。今この瞬間にも桜はあの俺の精液をライダーの唇に、舌に、口に注いでいるんだろう。桜の口の中に溢れるそれはどんなに温かく、どんな匂いと舌触りがするのだろう。それを流し込まれるライダーは、それをどんな味に感じるのか。想像が現実を押しのけ、身体があるのが忘れそうになる。

絡み合うライダーの薄いけど肉感的な唇、桜の可憐で淫らな唇。それが白濁液に濡れ、そぼって滴る液を流し込んでいるんだろう。それがミルクやアイスであってもどうして良いのか分からないほどエロチックなのに、俺の精液なのだから……

俺が抱きつかれて精液を飲まされても、桜だったらいいのかもしれない。

でも、それがライダー相手であることは、まったくの想定外の事態だった。

「ん……はぁ……ああ……」

長いキスが終わった。桜の唇が離れたらしく、そのまま仰け反って力を失う桜。

ライダーは茫然自失の態で、腕に桜を支えている。俺はやっと走り出し、桜の身体を受け取る。腕の中で桜はうぅん、と小さく息を漏らす。

「大丈夫か？桜っ！」

「は……ああ……先輩……私、ここまで我慢、でき……たんです……でも……」

息が浅い。喋るな、と言いたかったけどきゅと胸を桜に掴まれ、その声に耳を傾ける。まるで風邪で倒れた桜の譫言を聞き取るみたいで。ちら、と目を向けるとライダーは唇を指で拭い、眼鏡の向こうの瞳が曰く言い難い色を浮かべていた。

ああ、と俺はその桜の手を握ってやる。

「桜、よく……頑張った」

「でも……最後に……どうしても……我慢できなかったんです。私……」

そんなことあるか、ここまで辿り着けば約束は果たしたんだ、桜はやったんだよ、と褒めてやりたい。でも、桜の喘ぐような弱い声にある響きは、俺が感じているモノとは違う意味合いを帯びているような気がしてならない。

しゃがみ込み、桜の身体を楽にする。ライダーも並んで支えてくれる。彼女の俺を見る瞳に非難はなかった。でも、ライダーも俺の精液を飲まされた……と考えてしまうと、その場から走って世界の果てまで逃げ、世界の中心まで達する穴を掘って隠れたくなる。

だって、こんな美女が俺の精液を――精液、を、飲んだなんて。

「桜？我慢というのは？」
「私……ずっと、我慢してたんです……先輩の精液、飲んじゃいけないんじゃなくって……誰かに飲ませたいって、ずっと……」

それは頭の中を掻き回す桜の、思いも寄らない告白。手の力が抜けて、大事な体なのに取り落としそうになる。汗が頬を伝って落ちる。
飲ませたい？だって桜が我慢していたのは、吐き出さないようにするんじゃなかったのか？もしかした嚥下してしまいたいと思ってたのかも知れないけども、それはあまりに、妄想過多というものだろう。

目が痛い。瞳孔が開ききって、外の明かりが眩しすぎる。その中で桜の姿が刻まれ、あまりにもなんというのか――俺の知らないのに、知っている事がおかしくない魅惑的な姿。

「えっ？だって、桜……俺の、きつかったんだろ？」
「ちがうんです先輩、だって、先輩の……美味しいんです、だから私、これを口にしてるとすごく幸せで……だから、すれ違う人たちみんなにキスして、飲ませて上げたいって」

……唇が俺の中の乱れる感情を言葉にしようとするけど、心臓が脈動するのに心は動転してしまって何も出せない。そんなことを桜が考えていただなんて、どうして――どうして俺が考えられるんだろうか？
横目でライダーを見ると、彼女も……いや、彼女は何かを分かっているみたいだった。でも、桜が囁き出すと、その息を切らせて疲れ、でもどうしようもなく嬉しそうな顔を眺める。
桜は、その身体を喜悦に染めていた。手にした俺の腕にも染みこんでくる、歓喜の波動。それは俺に我を失わせるほど強い。

「美綴先輩と衛宮先輩がお話……してるときに、すごく……先輩にキスして流し込んで、衛宮先輩ってこんな味がするんですよ、って教えて上げたかった……でも、我慢してました。これが先輩との約束だから」

背中の筋肉が引きつり、こうして支えているのも辛い。桜の告白はあまりにも衝撃的で、それでなんと甘美なのか。キスされる美綴、町中の公衆の面前で流し込まれる俺の精液、あの美綴の唇が、舌が、俺の匂いで犯される。それを見たら、俺は正気ではいられない。
「……」
「これが約束でも……最後に……ライダーに、飲んで貰いたかった……先輩の精液、ここまできてゴールできたから、ライダーにも……」

譫言のようで、不確かな言葉。つまりは、辿り着いたからそれをライダーに飲ませた、飲んで俺の味を知って欲しかったと桜は言っている……だろう。俄には信じられないというか、信じることが俺の世界を凌駕しているけども、どこか、共感は出来た。
「だからですか……私をここにに呼んだのは、桜」
「……うん」

あそこにライダーが居たのは、偶然じゃなくて桜が呼んでいたからだったのか。
でも、ライダーもいきなり飲まされるとは思っていなかっただろう。俺の精液を飲め、というのはいくら何でもライダーに命令する事としては、桜であっても無理かと思う。
「ねぇ……ライダー？　どう……先輩の味……」
「……桜？　そうですね、士郎の味は……いい味がしました、桜と士郎が入り交じった、よく熟成された葡萄酒のように。桜、貴女の口はこんな薫りで満ちていたんですね」
「……な？」

もう、なにも、俺の耳にする物も目にする物も信じられない。
あの美しいライダーが、俺の精液を美味しいだなんて……ライダーはうっすらと満足したみたいに笑っていて、その姿が爛熟した華の芳香豊かな桜と違った柑橘系の色気というか、そういう俺に動悸を感じさせる。

信じられない、だって、桜もライダーも俺を……そんなに美味しいだなんて。

「桜の声、私には酔っている様に聞こえました。こんなに強い精を口の中に含んでいたらさぞや……いいお裾分けを頂きました、桜」
「うん……嬉しい、ライダー……先輩も……先輩？」

腕の中で、桜が首を上げる。
ああ、桜……と俺はその呼ぶ声に答える。桜はようやく苦難から解放され、安堵と満ち足りた思いに微笑みながら――その、柔和な顔は俺の心をわしづかみして、喉を絞って目の奥から涙を滲ませそうになる。
「私、ちゃんと……約束、守れました」

36

「ああ、ちゃんと……俺の家まで我慢できた。本当によく……」
「よかった、先輩……ご褒美、おねだりして良いですか？」
ああ、と俺は頷いた。
たとえ心臓を剔り出せと言われても、俺は素手で引きずりて銀の盆に据えただろう。
桜ならば、桜なら――
「抱いてください、先輩――ライダーも、一緒に……先輩と……」
嫌、なんか言えるはずもない。
ライダーも、こくりと頷くのが分かった。そう、彼女も俺を味わってしまった以上、そこに参加する権利も義務もある。それに桜がそう願うのだから、もし彼女が嫌だと言っても死ぬ気で引き留める覚悟は出来ている。
彼女は薄く微笑み、尋ねる。覚悟が出来ているのですか？とライダーが尋ねる。
「士郎……宜しいのですか？」
「嫌な訳あるか、ライダーも桜もおかしなりそうに綺麗なんだから……行こう。これのご褒美じゃなくても、桜を抱きたかったんだから。お預けしてて御免な、だから……」
「先輩……はい……」

§　§

まだ陽が高い中で、敷き布団だけ敷かれている俺の寝室。
いつも桜と寝るときは夜遅くで、窓から柔らかく夜の明かりが差し込み、桜の白い肌を輝かせる。それは桃の肌みたいにみずみずしく、柔毛に覆われて手触りが良さそうに見える。でも、今はあまりにも明るい、その中で桜の身体はくまなく俺の目に映る。
肩、胸、腰のまろみ、足はむっちりとしていながらも太ってはいない、肉感的というそのぎりぎりの線に居る。桜が俺の腰元にうずくまり、指を俺の肉棒に這わせる。
「ふふふ……士郎？感じてますね、こんなに硬く勃起させて」
それだけでも熱く燃え上がりそうなのに、もう一人の女性が並んでいる。
背の高い、かっこいい裸の姿。桜が抱きしめたい愛らしさであるのだとしたら、ライダーの裸は美術品みたいだった。バランスというか、骨格が桜と違う感じで、でも女性らしい柔らかさは綺麗にその上にある。
紫の長い髪が、お尻まで包み隠すように流れている。背中の上に流れるその髪の流れが肌を隠し、それがひどく官能的だった。
眼鏡は掛けたままで、それが……まるで綺麗なお姉さんに襲われているようで、ぞくぞくする。実際ライダーはこの上もなく綺麗で年上の女性であった。
「ん……はぁ……」
桜が俺の亀頭に舌を這わせる。学校でもフェラチオされたけども、それがもう一度あっても飽きることはない。ぬっと温かい舌が亀頭の上でゆっくりと、俺の恥垢を粘膜からこそげ取るように動いていった。
桜は目を閉じ、まるで美味しい料理を味わうように――俺の味を確かめている。この俺の股間から立ち上がる性臭でさえ、まるでチーズを味わうように感じているんだろうか。
「あ……んっ」
桜のフェラチオを眺めているライダー。ライダーにもして欲しい……とお願いしたかった。二人で舐められたらそれだけでぶちまけてしまうかも知れない。でも、俺の熱っぽい視線を穏やかに笑ってライダーは返す。笑いの温度は高くないけど、不安を覚えることがない。
「桜……疼いていますね、この躰が」
ライダーは桜の背中に被さる。俺が身体をたてて一番下にいて、その腰に桜が被さっている。布団の上を動くライダーは、その紫の髪を散らしながら桜の背中に密着する。ライダーの大理石の肌と、桜の果実の肌が重なる。その間に指を差し込めたらどんなに気持ちいいのかと思うほどに。
「あ……ライダー……」
「桜は士郎にして上げてください。私はサーヴァントの務めを果たすことにしましょう……桜、貴女がこんなに身体を持て余しているのですから、私が慰めて差し上げます」
丁重にライダーは言う。寝床で同衾してる、ひどく冷静な言葉がむしろ雰囲気をもり立てる。まるでお嬢様と家庭教師を一緒に抱いているみたいな――ステロな欲望のイメージを覚える。でも、それは股間に押し寄せる快感の波の中で揺れ、沈んでいく。

37

ライダーの手が、大きな桜の胸を後ろから抱く。
指がくっと桜の乳房を掴むのが見えた。ライダーは肩にキスをし、指を乳房の上で揉む。たゆんたゆんとその胸が柔らかく揺れていて――ああ、あの胸は中に桜の感じる肉と神経が詰まっていて、あんな風に揉まれたらきっと気持ちいいだろう、と。
「ふあぁ……ライダー……んっ……」
「桜？感じるのは乳首ですよね？私も知っていますから……士郎のお口が留守になってますよ」
俺はそんな言葉を聞きながら、息を荒くして舐められるばかり。ちゅぷり、と桜の唇が俺のペニスを飲み込むと、またあのめくるめく桜の口腔の快感に呻く。目の裏ががんがんするような――でも、目も今は重要な性器になっておれを興奮させる。
ライダーの細い指が、くりくりと桜のピンクの乳首を弄っている。
後ろから抱きつくライダーの愛撫は、巧妙だった。男の俺がそんな風に触ることが出来ないほど、丹念で繊細な動き。それは俺の乳首を弄る桜の指を彷彿とさせた――女性の指の動きは、俺には真似できそうにない。そんな隔絶を感じそうな動きが、桜を戦慄かせる。
「あん……ん……ふ、ああ……せんぱい……ふひゃぁ……あ……」
「桜……ふ、感じて……ライダーにされてるんだね……ああ……」
首筋を舐めるライダー。眼鏡を掛けたままの顔は秀麗で、まるで吸血鬼が姫君の首筋を舐め吸うように見える。いや、あの白く整った歯が桜の肌を裂くことができるんだろう、でも舌と唇が後を残す方が、桜を感じさせている。
俺のペニスを口の中でもごもごと動かす桜。どこの何に触っても、この欲望の性器はビクビクと感じてしまう。頭も心も翻弄されるようで――舐められたまま、射出する前に気絶してしまいそうで。
「あん……ん……はぁ……ああっ、先輩……美味しいです、先輩……」
「しゃぶりついてますよ、桜。学校でもそんな風に士郎を舐めていたんですか？その顔が士郎を喜ばせたんでしょうね、さぞかし――」
「それは……うっ、ああ……」
ライダーに見られると、根本のあたりがじりじり焼けるような感じがする。あの砂色の瞳は眼鏡越しに俺を観察し、時々唇から漏れるペニスが全部見られるとそれがまるで熱く燃えた石になってしまうように――いや、それほど硬く、熱くなりたい。
「あ……ライダー……ん……」
「ここも……ああ、すごいです、桜。こんなに濡らして我慢しているんですね」
片胸を触っていたはずのライダーの手が、桜の身体の下に消えている。
濡らして我慢している。その言葉が意味するのはあのライダーの指が、桜のスリットの中をなで回しているということ、だった。理解するな、と本能が悲鳴を上げそうだ。
だって、桜の濡れやすい秘部を関節の間が長いあの綺麗なライダーの指が忍び込んで、どれくらい濡れているのかを確かめているんだ。想像するだけど、いや、実際に見たら俺は我慢も何も、痴愚に成りはててしまうと。
「ひゃっ、ああ……やめ、て、ライダー……ああ……」
「止めろとおっしゃるのでしたらご意向に従います。ですが桜、こんなに貴女が濡らして疼いているのでは説得力がありません」
「う……あ」
ライダーの言葉は慇懃で、むしろからかってるような感じがする。ライダーの忠実な言葉は、むしろ桜をなで回す第三の腕みたいなものなのだろう。くちゅぬ、と口ではなく、桜の秘部が立てる音が聞こえたような気がした。
まだ桜の口の中に俺のモノがある、でも、もっと他の所に触れたかった。
俺の腕も、足も何もしていない。こうやって横たわっているだけでは勿体ない、ご褒美に桜とライダーを共に抱けるのだから……太陽が高くても、どんな深い夜に行われる痴戯よりも淫らに振る舞わなければいけない。そうでなくて、何のための桜の願いなのか。
手を伸ばし、そっと桜の頬を撫でる。
顔を上げ、口からペニスを抜く桜の顔。目は俺を信じ切り、潤んでいる。そしてあ、あ、と小さく口が快感の吐息を漏らす。ライダーの指が、あの桜の身体をまさぐっている。
――むら、と心の中に妖しい炎が揺らめくような
それが嫉妬であり、欲望であり、俺がおかしな事をさせてしまう不浄な衝動であると分かる。でも、今はそれを貯め込んではいけない、外に吐き出し、俺と桜とライダーの中で燃やし尽くさないといけない……と。だから、俺は桜の頬を撫で、そっと呼びかける。

「桜……そんなに感じてたんだ。俺の精液を口の中に含んで、どろどろにしてたんだ……もしかして少し飲んだ？」
「は……はい……ほんのちょっとだけ……でも、先輩のが体の中にじわって広がったらすごく気持ちよくて、こんなに気持ちいいんだったら他に人にも……ん……」
「ライダーは、どうだった？」

俺が水を向けると、ライダーは曖昧な笑いを俺に向けてくる。誘惑なのか、それとも主への忠誠なのか、それとも——彼女自身の欲望なのか。肌の内側に染みこんでくる、長い髪の向こうの微笑み。

「感じました、士郎の精は……あんなに情熱的な精を飲まされたら、私でも高まってしまいそうです。桜をこれほどに興奮させているのも当然です」
「じゃぁ……」

体を動かす。ずず、と膝で布団がすれた。

俺は身体を抜き、桜を抱いたままのライダーの背中に覆い被さる。
肌の間にあの長い髪が挟まる。触れる肌はほどよく冷たく、背中に触れるとそれでまず感じてしまう。胸板が肩胛骨に、股間が控えめなお尻に当たる。そしてさらっとした髪が間にあり、それがなんとも——きもちいい。

「士郎？　なにを——」
「感じてるんだろ？　ライダーも。だからもっと……」

桜にライダーがしているみたいに、後ろから胸を抱く。
ライダーは俺の抱きつきに驚いて身を翻したがったようだけど、俺が先にくっついてしまったので果たせない。いや、桜を手にしているから遅れたのだろう。

「ふふ、ライダーも可愛がってくださいね、先輩……私もライダーに」

桜が身体を動かす。俺がライダーの背中から、桜が前からライダーをサンドイッチにする。手に触るライダーの胸は桜よりも小さかったけども、それはあくまで比較の問題で指に余るほどに大きい。たぷんとしたゼリーのような揺れる肉じゃなくて、中に筋肉で支えられた張りのある胸で、やっぱり命を得た大理石の身体を抱くような感じがある。

「桜も士郎も、私のことは……はあ……！」
「だめ、ライダー……は……」

桜がライダーの頭を抱き寄せ、キスする。また俺の臭いの染みついた口と舌で、ライダーの舌を貪っているんだろう。
この格好のままだと、一番下にいる桜が苦しいんじゃないかと感じる。そうなると……俺がライダーを抱いて、抑えた方が良い。その上で桜が好きに振る舞えるように、と。

「桜、ライダー……こうして、こう……」
「ああ……はっ、ああ……」

俺が仰向けになり、その上にまた仰向けのライダーを横たえる。被さるライダーの身体は俺より上背があるので被さって隠れそうになるけど、なんとか肩から顔を覗かせる。
俺の身体の上に、ライダーの裸体が広がる。鎖骨から綺麗な肌が広がり、俺が触れている胸が豊穣な丘を描いている。そして腰が引き締まり、その下にはライダーの女性の丘、薄い色の恥毛に覆われた秘所が広がっている。

昼明かりの下で見る、眩しいほどのライダーの裸体。腰に当たる股間がぶびゅり、と精を漏らしてそのお尻と髪を汚してしまいそうだった。

「士郎、この格好は……やはり恥ずかしいです、私は——んっ！」
「ライダーの身体……こんなに綺麗なのね……」

桜がライダーの身体を撫でる。目を期待と興奮に色付かせ、お腹の辺りをさわりと撫でる。胸を俺が触れているからなのか、それとも……俺は指を動かしライダーの乳房と戯れるけど、あのねっとりとした動きが真似できない。こうしてお腹を撫でる桜の手のほうがたおやかで、見ている俺を感じさせる。

桜は四つん這いになって、俺とライダーの上にある。桜は薄く微笑みながら、ライダーを見つめている。彼女が本当に感じているのかを知りたがってる瞳、そしてこの三人のセックスをどうして愉しもうかという予期が彼女から陽炎を立てるみたいだ。
ふふふ、と漏らす笑み。息苦しいほどの桜の快感、それがライダーも感じるのか……桜がお腹をなで回すと、それに答えるようにライダーの腰がむずむずと動く。

39

「桜、貴女の身体も綺麗です。士郎も桜に夢中なのですから」
「いや、ライダーの身体も綺麗だと思う。だって……俺がこんなになってるのは、桜に舐めてもらっただけじゃない、こうしてライダーに触れてるから、だし」

腰をぐ、とライダーのお尻に押しつける。硬く勃起した先端がライダーのお尻の谷間に触れると、俺もライダーもその感触に軽く身震いをした。胸を撫で、乳首を指で摘む。桜がそんな俺の指と、綺麗なライダーの乳首をぺろりと舐める。

「は……ああ、桜も……そこを……あ……」

俺の指が突起を持ち上げ、桜の舌が舐める。コンビネーションの責めに、甘酸っぱくライダーが身を捩る。今まで女神像を抱いていたみたいなライダーの身体だったけど、今感じて初めて女性の、肉のある身体だって実感する。

桜が背中を丸め、舌を操る。俺の指にもぺろぺろと桜の舌が触れ、ムズかゆいような感じがする。これが乳首だったらどんな感じがするんだろう、俺の胸を触れる指が荒々しく動く。

「ああっ……は、う……ああ……」

ライダーの感じている顔が見えないのが惜しい。あの人間離れした美貌が快感に歪むと、どんな顔になるんだろうか?きっと見ているのが男でも女でも、身を狂わせてしまうほどに気持ちよさそうな顔なんだろうか?

桜が顔を起こして、そんなライダーを見つめていた。瞳がぼう、と惚れたように輝き――

「ライダー……かわいい、そんな顔して――感じてるのね……」
「桜っ、ああああっ、あ……あー」

桜の舌が、手の動きが激しくなる。

俺の指ごと胸を揉む。ぐにゅりと形を変える胸、そしてはぁはぁと荒い息を吐きながら雌獣のようにしゃぶり付く桜、その動きは女の身体に火がついてしまったように、謂われのない興奮に駆られているみたいな。身体が波打つ、ライダーが、桜が。

俺はライダーを抱き、敷かれてまるで鉄板みたいに熱くなる。

桜が俺の右手を胸から引きはがす。邪魔なのか、と思って下げようとするとそのままその手を誘って、ライダーの身体の上を滑っていく。指が絡み、導かれるままに――

「先輩――いっしょに、ライダーのあそこを……可愛がってあげて」
「あっ――」

手が動く、桜に引かれ、お臍の上と陰毛の丘を通り過ぎ、そのまま一直線にライダーの秘密の部分に、まるで巣穴に走り込む獣のように。指先が触れる感触は目まぐるしく代わり、そして――

くちゅりと濡れる肉に、押し込まれた。

「はぁぁあああっ!」

ライダーが身震いをする。指が触れているのはライダーの秘部だった。そこに桜の指と一緒に入っていってかき混ぜるように――ぐしゅりぐしゅりと指が、ライダーの内側に触れる。

桜はライダーの胸に口付けし、俺の指を押して操る様に繰る。紫の髪が舞う、俺の頭にライダーの仰け反った頭がぶつかりそうになる。ライダーの髪から良い薫りが広がる。

触れる人差し指と中指が濡れる。柔らかな媚肉の感触、それを撫で、擦るようにする。ライダーの身体がくねる。ここを触られると感じるだろう、敏感なところなんだから――でも、背の高いライダーがこんなに色っぽい仕草をされると、燃え上がるように興奮する。

「ああっ、そこ……そんなに強くされては、桜……はぁ……」
「濡れてる、ライダーの……先輩の精で感じているのね……私もこんなにして、はっ、あ――」

桜の首が上がる。乳首をくわえ、持ち上げるようにして――細い瞳が覗いてぞくっとさせる。ライダーがは、と息を飲む。感じるところを弄られて苦しいのか、それとも快感に身を委ねているのか、声は俺に流れ込む水銀のようで。

「ライダー……こんなになってる。こうすると……」
「はっ……く、はぁ……あん……ああ……士郎、いい気持ちです。そこをそうされば――んっ」

指がクリトリスの辺りを触れる。襞の寄ったそこを触れると、差し込んでいる手をきゅっと太股に締めうめられる。ライダーの引き締まった肌に挟まれ、その肌と秘裂が粘膜になることろを俺の指が触れている。

そんな俺を誘った桜の指がどこに行ったのか。まだ一緒にライダーの太股をまさぐって

ると思ったのだけど……

「うっ、ああっ！」

ライダーの身体が蹲るように、ぐっと背筋が丸まろうとする。眼鏡が落ちそうになったのか、かしゃりという音を立てて……桜が何をしているのか、見るとうっとりとした瞳でライダーを見上げている。唇からは、と滑るような息が漏れる。

「中も……ライダーの中もこんなになってる……はぁ……」

ぐしゅりという水音。それを聞くんじゃなくて、身体越しに感じる。桜はライダーの中に指を入れているんだろうか、見えないけども間違いはなさそうだった。桜の顔が、責めているのにぶるりと快感に酔ったように細く震えていた。

後ろから抱いているのが、もどかしい。股間ははち切れそうで、この身体の熱を持て余しているのにライダーの身体をまだ味わっていない。桜の熟成しきった女の身体とは違う、別の意味で完成さえ見事に実った身体を触れているのに、まだ——

「んっ、はっ、ああ……は、あ中で桜の指……が……そこを……」

「中からどろどろって溢れている、ライダーも……ふふ、先輩？ライダーも女の子なんですね、私の指に絡みつく程濡らして、私の指にライダーがおねがいしてくれんですよ？」

桜の瞳が俺を見据える。それがまるで子供のように、知った秘密を共有して貰いたいという楽しみを感じて居るみたいな笑みだった。でも、指が触れているのはライダーの秘密の隧道の中で、それは熱く火照って濡れている——のだ。

俺はそんな桜に、懸命に頷くしかない。ライダーの背中がぴったり密着し、そのほどよく冷たく木目の細かい肌の感触が、その体重が嬉しいほどにここちよい。俺がライダーの蕾に、桜が膣口の中をまさぐっていて、指が動くたびにああ、と美しい喘ぎ声が耳に入る。

「はぁっ……ああ……桜……士郎も……こんなに私をしなくて、も……ふうあ……」

「ライダー……綺麗だし、気持ちいいし……く……ああ、もう……」

桜の責める身体の動き、うねるライダーの腰。身体の上にある旋律は複雑で、読むことが出来ない。背中は汗でびっしょり濡れ、シーツが張り付く。でも、ライダーはこんなに息を弾ませているのに汗一つ掻かない。でも、その肉体の中が官能に滾っているのは間違いない。

身体の間に挟まったペニスが、ガチガチに硬くなっていた。桜の口に愛撫され、今はこうやって挟まっているけども、ライダーのお尻に当てたまま果てそうだと思ってしまう——

「うあっ！」

突然襲ってきた股間の感触に、声を上げる。

濡れた手が俺の肉棒を掴んでいた。粘液に濡れ、ライダーのお尻の下にある俺を掴んで擦るように……桜の手が、股から忍び込んで俺を探り、掴んでいた。思わぬ刺激に足が攣りそうになった。

桜の手は、挟まりながらもぬるぬると俺の硬い肉棒をなで回す。手首がくねり、ぐしゅぐしゅと浸された液体でこね回すように——思わずライダーの身体に抱きつきそんな、俺に回ってきた桜の責めを耐えようとしてしまう。

「先輩……ごめんなさい、こんなにしてたのに……硬い……はぁ……」

「う、あ……桜……俺……どうしたら……」

どうしたらいいんだろうか？このまま桜に亀頭をこねくり回されていたら、そのまま桜の手とライダーの美しいお尻を俺の精液で汚すだけになってしまう。それなら、もっと温かく締め付けてくれる中に入りたい——

俺が荒い息をライダーの肩にはき続けていると、すっと彼女の肩が持ち上がる。手が俺の頭に巻き付いて、頬を俺に寄せるようにするライダー。密着した身体と身体、それは吸い付いて快感を肌で伝え合うような。

「士郎……桜、お願いです……私に入れてください……」

渡りに舟、そんな言葉がライダーの口から漏れる。囁く小さい声だったけど、俺にはしっかりと聞こえていた。俺の手をライダーの両太股に添え、少し開いてやる。

ペニスを握る桜。ライダー越しにちらりと見る……もし桜がいいと言ってくれるんなら、ライダーの中に入りたい。駄目ならそのまま果てさせてくれ——と。

「……先輩……」

桜の顔には、迷いがなかった。躊躇や逡巡があるはずだった、だって俺がライダーを抱く

41

のを目の前で見させられる筈なんだから。でも、桜の瞳は凪いだように穏やかで、その水はぬるりと――好色に粘っている。

瞳は淫蕩な桜という液体を満たしているみたいで、その身体、その髪、その手がすべて俺と桜を快感に導きたがっている。その為に俺がライダーを抱いたとしても、桜はむしろ悦楽に浸るんじゃないかと――思う。

ぬっと、ペニスが動かされる。予期したのか、ライダーが腰を上げる。

桜の手が、俺の肉棒を据える。先にくちゃっと当たる柔らかい肉の刺激。俺の亀頭も、当てられているライダーの秘裂も濡れそぼっていて――溶けてめり込んでしまいそう。

「さぁ、ライダー……先輩に、して貰ってください」

「う、あーっ！」

ペニスを摘む指がぐっと、俺を進める。女陰の柔肉を掻き分け、愛液を潤滑剤にして俺はライダーの中に導かれた。入り口がほどよく締め付ける感覚、でも中はきつく、俺を迎え入れながらまるで螺旋に波打ちながら奥に奥にと飲み込んでいくみたいで。内側の襞の感触は女性器のそれのはずなのに、俺に違うイメージをどうしても惹起させる。

――蛇に飲まれている。

「はぁあ……士郎……いいです、士郎のペニスは……私のなかでびくびく言ってますよ」

笑うライダー。声が喜んでいる、そう、さっきまで指で可愛がられていたときは女性だったのに、俺をくわえ込むと牝の本性を露わにしたような。ライダーの中はきゅっと締め付けてくる。桜のあそことは違った、スリムな感触というのか、でもそれはどこまでも俺が飲み込まれ続ける妄想を振り払いきれない。

「入ってる……ん、先輩のがライダーの中に……どう？」

うっとりと尋ねる桜。桜の目の前では、きっとライダーの花唇の中に突き刺さる俺のペニスが目の当たりになっているんだろう。俺は身体の下で腰を使おうとするけど、やはり乗っかられているので満足には出来ない。

ふふ、と寄り添うライダーの口元が笑う。妖艶な微笑みで、快感と焦りの中にいる俺のことを知り尽くしているみたいな、そんな余裕の微笑み。俺に犯されているというのに、ライダーは美しく――遥かに技に長けた、魔女のような。腰がぶるぶる震えるのは快感のせいなのか、それとも……彼女を満足させないと、去勢されてしまうと言う本能の恐怖なのか。

「いいです、桜はいつも士郎を……ふふ、困ってますね？　士郎、では」

ライダーがとん、と手を着いて上体を起こす。俺が寝転がったままで、太股を開いて丁度俺の身体に跨るような格好だ。後背騎乗位で、まさに彼女らしい――とその背中と紫の長髪をみて、思う。

「私が動きますので、士郎はそのまま感じてください。私を……」

「ライダー……ん……」

桜がライダーに抱きつくのが見えた。手が彼女の首に回っている。

ああ、じゃぁ俺このまま――と思って、ライダーを感じることに専念しようとした。腰はくびれ、俺を跨いで広がるお尻は引き締まって何とも美しく……

と、そんな感慨が俺の中から一気に吹っ飛んだ。

「うわぁぁぁあああああ！」

俺のペニスが文字通り、締め付けられた。ライダーの中に直立して貫かれていたそれが、捕獲されたという言葉を思うほどにぎゅっと、膣の動きで締まる。その上に、ライダーが俺の上で腰を振るい始めた。

リズムが、違う。俺が桜とセックスするときも勢いはあるが、まったく異質の、俺を乗りこなしてなおかつこの身体にライダーという感覚を染みこませ、そして意のままに操り快感の中で果てさせようとする、そんな、ショックを覚える動き――

じゅぶじゅぶと音を立てる俺のペニス。でも、ライダーの腰の動きは激しい。

回転し、上下し、ひねりを加えながらも抜け出しそうで抜け落ちない。亀頭まで上がったかと思うと、奥深くに飲み込まれる。膣の中に当たる壁の感覚までどう俺に働くのかを彼女は知悉し、そして俺を――

「おっ、ああっ、あああ！」

42

はしたなく声が上がる。腰がビクビクと痙攣し、ペニスがライダーの中でもげそうになる。膣の襞にしっかりとくわえ込まれているのにそれが擦り上げらっれる。腰を触っているけども、複雑なその騎乗の動きは俺には理解できない。

理解できないから、すごく――それに翻弄される。お尻が俺の視界の中で動き、その間にぬっぷりと飲み込まれ、液にまみれた俺の肉棒が出入りする。

「ん、先輩……すごい……はぁ、ライダーったらそんなに」

「ふふ、士郎に気持ちよくなって貰うにはこれくらいしませんと……ん……は……」

ライダーと桜の会話、二人は首を抱き合って、唇を絡めながら言葉を交わしあっている。俺はそれに口を挟む余裕もなく、このライダーの大胆な騎乗位の快感に打ち震えて――腰にぶつかるライダーのお尻も、くわえ込まれているペニスも、俺を仰け反らせるほどで。

「うっ、はっ、ああ、あああああー!」

「ライダー、こんなに動いて……はぁ……ああ……」

桜の指が接合部に触れた。それにじゅぷる、と音を立てながら擦る俺の肉棒。見えない、桜が見えないことが無性に悔しい、こんなに気持ちよくて喘いでいるのに、桜はライダーと向き合ったままで。俺を見て欲しい、と叫びたくなる。

俺がこんなにライダーの身体で感じている姿を、桜に見られたい――

「桜……俺……こんなに……ごめん、はっ、ああ、ああうあああああー」

「桜。私だけではなく、ん、士郎を――はぁ……あ……」

腰をくねらせるライダーの声。こんなに気持ちよさそうに聞こえるのは、やっぱり彼女もその内側で俺を感じているからなのか……桜、の声がどうしても気になる。

ライダーの身体の向こうからぶれて現れる桜。そのまま布団の上を這い、俺の傍らに進んでくる。そんな桜に見られ、俺はライダーに跨られて膣に絞られ、恥知らずな情交の快感に浸っている。

「桜……は、ああ……俺……ああああああっ!」

「ふ……この格好では面白くないですね、士郎。では」

ライダーが声をあげると、旋律の隅に達した一点で腰を、身体ごと回転させる。足が俺の身体を跨ぎ直し、ライダーは素早く俺の上で騎乗位の方向を変える――そうなると、捻られる俺の肉棒の感覚はなかばねじ切られる苦痛が強い快感になって、反り返りそうなほど。

俺の上でライダーがスピンして、向きが変わる。でも、抜けないんだから――

「うぁぁぁ、ああああああ!」

「先輩……」

桜が俺の手を握る。指が絡み、柔らかに触れる。指が桜と俺を繋げると、そこから腕が痺れるような力が伝わってくる感じがした。あ、はーっと喉が息を漏らし、桜を音を上げて見つめる。さっきから快感のあまり叫んでいる俺を見守る桜の顔。

それは、すごく――俺を慈しむ優しさに満ちていた。胸板に桜が頬を寄せ、俺の心音を聞くみたいに頭を横たえる。桜の髪が胸に広がり、その向こうには眼鏡の奥に薄くたゆたう快感を宿らせ、髪と胸を躍らせるライダーが居た。

「いいです、士郎……私も……は、こんなに熱く硬い物を味わうと……はぁ……」

ライダーの身体が跳ねる。いや、それだけではなくて腰がこんなに繰られると持ち上がって持って行かれそうな気がする。胸が綺麗に揺れて、ピンクの乳首が振れる軌跡が見えた。俺は桜の手を握る。顎が上がって布団に頭をのめらせそうになって、せめて桜に掴まっていたい。

「桜、もう……」

「先輩……は……いいんですね……こんなにぐちゅぐちゅ言わせてライダーを犯しながら……肌をこんなに熱くして気持ちよさそうに……」

桜の唇が胸に触れる。肌の上に感じるそれは天使が指を振れたように柔らかく、それでいて娼婦の口付けの如く熱い。吸い、俺の肌を桜は進んでいく。胸から首筋へと桜が上がっていって、俺は桜を握りしめ、ライダーの動きに翻弄されながら譫言のように――

「いい……ふ……あっ、ああ……士郎、もう……そろそろ限界ですね……ふふふ……」

「だ、ライダー……だから、俺……桜も……」

指を握りしめる。きしっと骨が軋みそうなほどに強く、桜が痛いという声が上がらないけどつめがめり込んでしまいそうで。でも、桜も強く握りかえしてくる。桜の髪と、剥き出しの肩、背中の美しい線、ライダーが俺の腹に手を置いて、テンポを上げて腰を操る。

43

あ、は、は、とまるで上がる声は首を絞められた動物のよう。ライダーのその与えてくれる官能がきつい、まるで陽に灼かれてアスファルトの道をあぶられつつ走るような、でもその乾ききった身体がどうしようもなく快感であるみたいな――アドレナリンとエンドルフィンが入り交じる、脳圧が高く内側から押されて目が飛び出てきそうなりそうな快感だった。

「あ――あああっ、ぐ、はぁ……」

「私も……ん……はぁ……ふ、ああ……」

頬に振れる手、それは桜の掌で――ふっと柔らかさに我を失いそうになる。

それはマラソンの最後で、温かい手と真っ白なタオルに包まれ、抱かれたようだった。身体の筋肉が全て引きつって、それが股間で吊り上げられているみたいなこのライダーのセックスから、解き放たれたように。

「先輩……んっ！」

桜の唇が、俺の目の前を塞ぐ。鼻に、口に桜の仄かに甘い花の香りが立ちこめた。

唇はマシュマロみたいで、それが俺の口を塞いで――合わさる顔、見つめる瞳、桜の暖かさとその感触。それが身体の堰を断ち切った。

股間が、尿道が内側から突き上げられ、まるでペニスを身体から射出するように。

「んんぅ！」

ライダーの腰が落ちる。噴き出す俺の精を身体の奥で受ける様に。

その願いを叶えて、俺は射精した。二度目なのに、どくどくと精をライダーの中で吐き出した。睾丸が身体の中にめり込みそうな、強い射精の快感。身体の緊張は桜のお陰で解けたけども、まだライダーの体の中だけは硬く硬直している。

ちゅ、と俺を舐めている桜の舌が離れた。握り合わせた指も、解れるように解ける。

桜が身体を起こす。俺は精魂も尽き果てたように身体全体で息をして、疲労に沈む。ライダーが動いていたのに、ものすごい運動をした後のように疲れていた。

「は……ああ……士郎……こんなに私の中に……ふふ……」

ライダーは、俺の身体の上で項垂れている。長い紫の髪が身体に被さり、まるで絹のベールを被っているみたいに見えた。情交の後のライダーはほどよい疲れと色艶に満ち、なんとも――綺麗で、そのまま見とれそうになる。

どくり、と射精の一滴が絞り出される。俺のペニスで栓をされたライダーの膣の中が俺の精液で満ちているのが分かる。

「さ、くら……」

頭を振る。ライダーは美しい、でも桜の愛しさとは違う。あそこで桜がキスしてくれなかったら、俺はまるで焼けた石に射精するような苦しい絶頂を迎えたに違いなかった。苦痛と紙一重のセックス、でもそんな危ういものより、俺は桜を抱きたい。

桜はしていない、だから……思いっきり桜を抱きたかった。

今日は二度も射精して、身体の中が空っぽになった気がする。だがそれはそれ、いざとなれば血も水も俺の精に替え、桜を抱き、桜の中にまき散らしたい。

息が、肺の中で濁った渦を描く。今は少しでも力を取り戻さないと、桜に――ライダーの顔が上がる、でもそんなライダーに手を伸ばすのは俺じゃなくて、桜だった。

「ね、ライダー……」

「桜……は、あ……」

桜はライダーの身体に被さる。ライダーが腰を上げ、俺を抜こうとする。ぬっぷりと絞るようにして抜けるライダーの秘所。膝立ちになったライダーと、それに縋り付く桜。

身体をなんとか丸めて外し、桜とライダーの様子を見る。ライダーに桜が唇を、指を身体に這わせる。細く綺麗なライダーの身体に、まろみを帯びた肉感的な桜が被さる。桜は胸を、お腹を、どんどんと舐めていきライダーは、身体を支えながら桜の愛撫を受けていた。

ライダーは膝立ちのままで、その身体を重ね合う。お腹に抱きついて身体を刺さる桜がライダーを見上げていた。

「ねぇ……ライダー……お願い……」

「なんでしょう？桜……はぁ……」

45

桜の顔は、ライダーのお腹の上にある。手は太股を掴んでいて、俺に桜のお尻が向いている。どうするのか、何をお願いするのか……布団の上で座り、まだ動悸の治まらない胸を押さえて聞く。昼間の明るい光が差しているのに、この布団の上は夜の淫らな雰囲気に支配され、暗くすら見える。

桜の、懇願する声。ものすごく済まないことをしているように言われ、それを聞くと何が何でも叶えたくなる、魔性の響きを帯びていた。は、と俺は息を止める。

「私……私が我慢してたのをライダーにのませちゃったから……ライダーの中を、私に飲ませて……お願い……」

耳からきた言葉がイグニッションになって、身体が猛然と動き出す。

ライダーの中のを私に飲ませて。俺がライダーの中に射精したあの白濁液を桜が飲むというのか。それは取りも直さずライダーの体に口を付けて桜が吸い出すから、どうなるかが——想像が先走り、興奮が身体を走り抜ける。

脊椎が軋み、力が背中に溢れる。剥き出しの肌から湯気が立ち、口から俺を疲れさせた老廃物が黒い煙になって吐き出され、神経が輝き俺の中を活力でもう一度甦らせようとしている。桜のその淫らさが、健気なだけに余計に俺に響く——

桜が身体を離し、もじ、と恥ずかしがって俯いている。その背中が、髪の掛かる肩が、後ろから抱きしめ欲望の限りを尽くしたくなるほどに愛らしい。

ライダーは桜を静かに見つめていた。眼鏡の瞳は澄んでいて、僅かに目尻が緩む。口が笑ってゆっくりと穏やかに言葉を紡いだ。

「桜……わかりました。どうぞ——」

ライダーの手が、足の付け根に伸びる。それは先程まで俺のペニスをくわえ込み、締め付け、飲み込んで居たあの性器を奥に隠す陰毛と割れ目の箇所だった。長いライダーの指が丘に触れると、そのままくっと割り開くのが、俺にも桜にも見える。

桜の肩が、震える。

「あ——」

ライダーの指とくつろげられた秘華から、たらりと垂れる白い雫。

それは粘ついていて、糸を引くみたいで、間違いなく俺の精液だった。か、と目の奥が、身体が燃え上がる。ライダーの唇が妖艶で、こうやって垂らして見せることがどんなに俺たちを掻き立てるのかを知っていてやってるみたいで——いやらしい、こっちがおかしくなりそうに。

よろっと、桜が倒れ込む。いや、倒れたのじゃなくて、四つん這いになって、その白濁液を漏らすライダーの股間に口付けする。桜の頭が、ライダーの腰の上に被さった。

「は、ん……先輩の……精液……ライダーの中ににこんなに——」

ぴちゃぴちゃと、液体を舐め取る音が聞こえた。

それは桜がライダーの秘裂から垂れる精液を舌で舐め取る音だった。ひたむきに、零さないようにと顔を押しつけ、唇ですくい、舌で舐め取りほじってその淫口から一滴でも多く俺の精を、あのどろどろとした液体を舐め取ろうとしているんだろう。

ぴちゃぴちゃ、くちゅくちゅと。立つ音は湿り、俺の中身をどろどろとかき混ぜ、骨も肉もとろけて熱くさせてしまう響きがある。

桜は夢中でしゃぶり付き、ライダーは目を閉じてその感覚に没頭している。俺は股間を硬くし、血が流れ込み続ける身体を感じていた。出来る、したい、桜と——

「桜——」

そんな俺の前に差し出されている、桜のまるいお尻。

四つん這いになったお尻と太股があった。腰からまるく女性の豊かな曲線を描くお尻が盛り上がり、それがまたとろけそうな太股に繋がっている。それはほかほかと温かそうで、不意に美味しそうだ——と味覚の本能を刺激する。

そして、それだけでも抱きつき唇でしゃぶりたいのに、桜は——濡らしていた。

お尻の間から内太股まで、透明な愛液を漏らしながら。膝まで濡れているそれはまるでお漏らししてしまったみたいで、漏らしているのが俺が欲しくて仕方なかったのか、それとも俺の精液を飲んで感じているのか、たらたらと漏れる愛液と、それを湧き出す泉のような秘裂があのお尻の奥にある。

「桜……ああ……」

「ん……あっ、んちゅ……先輩……ひゃっ！」

手を伸ばす。お尻の両丘に指が埋もれる。ふにりと柔らかな脂肪の手触り。

その触覚だけでもずっとこね回していたい。でも、息を飲みながら桜のお尻を掴み、左右に押し広げる。あれだけ濡らしている桜の奥を、この目で確かめたいから……

桜の背中が、電気を走らせたみたいに痙攣する。

俺の目の前で、桜のお尻が開かれていた。真っ白なお尻の谷間の奥に、僅かにくすんだ色の窄まりがあった。桜の肛門――お尻の穴。一番桜の中でもっとも奥の場所、見られると桜が身悶えして恥ずかしがる、排泄器官。でも綺麗で、ごくっと喉が鳴る。

桜がこっちを見て、必死に叫ぼうと――N

「あっ、せんぱ……あっ、そんなところ見ちゃ駄目――」

「……協力しますよ、士郎」

「あっ！」

ライダーが俺を見ていた。桜の舌を、膣口から液体を吐き出す感覚に浸っているだけじゃなくてちゃんと俺が何をしているのかを知ってるみたいで。は、と思わず息を止める。桜の上体ががくっと崩れる。

ライダーの動きは素早かった。俺を差し込んだまま身体を捻ったように、桜に股間を舐めさせたままで姿勢が変わる。布団の上に腰を下ろし、桜の頭を股に挟んで長い足で巻き込んでいた。桜の頭はライダーの腰に捉えられる。

桜は俺とライダーに挟まれ、身動きが出来ない。

自分の腰に桜の口を着けさせて、俺のなすがままを許すライダー。無言で頷く、士郎、あなたが桜を可愛がって、満足させてください――って言ってるみたいで。

「さぁ、桜――」

親指に力を入れ、お尻と太股の間を、まるで果実を割るように拡げる。

くぷり、と濡れた秘裂が割れ弾ける音を立てた様に聞こえる。俺の指に押し広げられた、回りに我慢できなくなってよだれを垂らして濡れる桜の割れ目。

薄いピンクで、ひくひくと震える粘膜の襞と窪み。でも、興奮で赤く充血して、窪んだ膣口の窪みからつつ、と透明の液を垂らしている。桜が呼吸をすると、お尻の穴と膣口が一緒にすぼみ、回りの襞も合わせてひくつく。

「うー……あ」

一瞬、目眩を覚える。濃厚すぎる桜の牝臭。

強すぎる香水を嗅ぐと、頭がちかちかするみたいな、そんな桜の濃い臭。

桜の女陰。それがこんなに大きく拡げられ、粘膜がてらてらと濡れて輝いている。

これだけ濡れると、指で触って奥を確かめようとすると、そのまま手首までとろけながら陥没してしまいそうな気がする。股間の肉棒で今すぐ突き、こんなに濡らし、疼いている桜の肉を内側からかき混ぜ、掻いてやりたくなった。

「せんぱ……い……お願い……先輩の、私に……ください……」

桜の切れ切れの声。それはライダーの割れ目を舐めるちゃぷちゃぷという音に混じって聞こえる。ライダーは俺と、桜の痴態を薄く笑って見つめていた。腰を上げる、そこに垂直にそそり立つペニス。まだ一回もしていないみたいな、はち切れそうな漲りを取り戻していた。

手を添えることなく、立膝になって桜のあそこに宛う。目一杯拡げた桜の秘部だから、入れる場所を間違えることもない。膣口に亀頭が振れ、ぐちゅりと濡れたお互いの性器が音を立てる。

桜を抱きたい、この柔らかな肉を、思う存分抱きしめて味わいたい。

桜の中を上からも下からも溢れるほどに俺で満たしたい。頭が痛くなるような強い刺激、体力といえそうなものを片っ端からかき集めて、それを燃やし、桜に供儀として捧げたい。それほど、俺は桜を、犯したかった。

いや、そんなのは些末で、牡の俺がどうしようもなく、牝の桜とセックスがしたい。

だから、腰に力を入れ、人間より前の何かに戻るみたいに――

「行くぞ……桜っ！」

「先輩……はぁ、ああん！」

俺のペニスが、桜の中にめり込んだ。
どろどろと溶けて忘だけになって飲まれていくのかと思ったけども、桜はちゃんと俺を迎え、包み込んでくれた。思わず声が漏れそうなほどに温かく包み込まれ、それでいてくわえ込む桜の秘道。腰が進むと、中からはみ出てくる愛液が染みだしてくる。
気持ちが良い。程よい、という全てに欠けることのない、でも何にも劣らない桜の感触。お尻に手を置き、腰を進め、桜の膣に肉棒を押し込んでいく。入り口も、中も、奥もぴったりと俺に触れ、その包まれる感触が、いい。
「ああ、あ、ああ……」
桜を貫きながら、目の奥から涙がにじみそうになる。
ライダーのセックスは振り回され、目眩がするようですごかった。でも、今の桜のこの温かい包み込まれる、どこか懐かしい世界に戻っていき、身体が感動で震えるようなセックスに比べれば――どうしても色あせる。お尻から手を離し、桜の背中に抱きつく。
桜は俺を包み込み、俺が桜を抱きしめる。絡み合う輪のように。
「先輩……は、ああ……ん……」
桜の胸を後ろから抱きしめる。お尻と同じぐらいたわわな、柔軟な女性の膨らみ。それに指を押し当て、背中に口付けし、俺は桜の中で動いた。
腰を引き、押し込む。じゅぷっと音がして、俺の太股も桜の愛液で湿る。ライダーと桜が立てる音が密やかなのに、俺と桜の立てる音はまるで歓喜に唱う声の様に、高い。
「桜……桜……ああ、ああ……んんっ」
「先輩……いいです……私、先輩に……されてます、今えっちな……中で……ひゃあう！」
ライダーの視線を感じる。それはどこか、うらやましがっているみたいで。
そんな風には私を抱いてくれませんでしたね、士郎。桜はとても喜んでいます――瞳は僅かな間しか触れなかったが、そんな暖かな励ましを覚えたようで。
俺と桜、桜とライダー。三人は一緒に、高まっていく。
俺はライダーに直接触れていないのに、彼女のゆったりとした気持ちよさが伝わってくる。桜は俺に入れられ、ライダーにしゃぶり付いて無我夢中に、快感で震えていく。俺は桜を感じ、腰を桜のお尻に、肉軸を子宮口まで届けと動かす。旋律は早く、テンポが上がっていく。
「はっ、ああ、ああ、ああ……」
「士郎……ふ、あ……桜、もっと上も……そうです、良い気分です……ああ」
「先輩……ひゃ、ふ、ああ、んんーっ！はっ、あっ、あっ、あっ」
抱きしめる、桜をぎゅっと。
腕の中に桜の身体はしっかりとある。逃がさないようにして、その奥を俺自身で探る。引き抜き、押し込み、肉の打つ音とじゅぷりと身体の奥で立つ音を感じた。桜の身体が汗ばみ、薫りを放ち、何度もくねる。背中の動き、胸の揺れ、触れる乳首は硬く、尖っている。
快感のダンスは、早く、お互いの足を踏みそうなほど。でも、踏んでももっと早く、高く、上がりたい。肌と肌が互いの心音を、心のパルスを、脊髄の燃える快感を伝え合う。桜の子宮の疼きが俺に感じ、俺の尿道のかゆみのような射精欲が桜に伝わる。
どの身体が本当は俺なのか、分からなくなりそう。それなのに熱く、充ち満ちた俺の中の本能だけは魂にくくりつけられたように間違いようがない。指を触れれば焼けて皮が捲れ上がりそうな、性愛の高揚。
「先輩、先輩……おいしいの、先輩の……だから、私の中……先輩で気持ちよくして……はあああああっ！」
「桜、桜、さく、ら――っっっっっっ！」
桜の身体が、強く引きつる。
内臓が押し下げられ、引き締まり、身体が快感で一サイズ小さくなりそうなそんな強い桜のオルガイズム。俺の中にあるペニスも膣に締め付けられ、逆に――サイズが一つずれて大きくなったような、クライマックス。
「ああああああああ！」
どん、とGを感じながら必死にしがみつく、そんな射精の感覚。
桜の腹の中に、俺が弾けて迸る。精液が広がるのは子宮だけじゃなくて、桜の腸に、膀胱に、胃に、肝臓に、すべての内臓にだくだくと注がれる精液が巻き散らかされ、桜を俺の精液でたっぷりと満たすような、そんな射精。

48

桜の身体が、かくっと絶頂で固まり、そして……力を失い柔らかく、優しくなる。
俺もそんな桜に重なり、中でまだどろどろと精を垂らしながら、その背中に横たわる。僅かに顔を起こすとライダーも首を反らせていた……彼女も達したのだろうか？

でも、桜の微かな囁きを耳にすると、隠しきれなくなった疲れで顔を起こす力もなくなる。
「せん、ぱい……はぁ……幸せです、先輩……こんなに……たくさんご褒美を貰って、私……」

ああ、桜、いいよ桜は……そんな言葉を返した気がした。でも、幸せで、こんな疲れのなかで目を閉じ、桜のたぷりとした柔和な肌に触れて瞳を閉じると、もう——

§　§

彼方に烏の鳴く音を聞いた。空の向こうで、群れ立ち空に舞い暮色を満たしたその空気の中でかぁかぁ、と響く鳴き声。目蓋は赤く染まるのは、夕陽の色か、俺の血の色か。横たわる寝床は温かく、枕にしているそれが微かに上下する。まるで、俺以外にそれも呼吸しているように。

目蓋を閉じたまま、俺は彼女の顔を思い浮かべる。整った鼻筋と線の柔らかい顎の輪郭、瞳はつぶらで微笑んでいる。唇が笑っているが、どこか寂しい。それは夕暮れの空があの紅いスクリーンの向こうに暮れた闇であることを隠しているような。
でも、俺はそんな桜が愛しかった。扇を差し伸べて沈む夕陽を持ち上げる事は出来ない、でも再び払暁が来ることを信じて、その夕陽を愛でる事は出来た。

闇は暗く、ねばねばしていた。それは息苦しく、骨を犯し髄を蝕み筋を痺れさせた。でも、その中を俺は駆け抜けた。だって、闇がどんなに暗くてもそれが無限の無明じゃないことを知っていて、手を伸ばして引きはがせば向こうに光が差す、そんなものだと分かってたから。

——ふわふわと頭の中が漂っている感じだ。どうしたんだろう、俺……

「……ん……先輩……」

小さく俺を呼ぶ声を聞いた。目蓋がその声で、ゆっくり上がる。開けっ放しに障子の向こうから流れ込む風が心地良い、まるで俺が裸で涼んでいるみたいに……いや、裸だ。間違いない。

「……あれ？」
「お目覚めですか？士郎」

上から優しい声がする。俺の名前を呼ぶ声色はライダーのそれで、天井の羽目板を見ていた瞳をそのまま横にずらす。紫の長く癖のない髪と、理知的な眼鏡越しの瞳、そして彼女も裸で首筋と肩が、そして胸もむき出して——

とりあえず、信じられないので目を擦ってみた。
生憎と目が霞んで裸に見えるほど、俺の瞳は便利に出来てはいない。やっぱりライダーは裸で、俺も裸。そうなると桜もどうしているのだろうか？と首を回すと、居た。

——桜も、か。

やっぱり一糸まとわぬ裸で、俺の下にいる。
俺が桜の太股の上に頭を預けていて、そんな桜はライダーに膝枕されている、という状況を飲み込めるまで数秒時間が掛かった。起きているライダーはともかく、俺も桜も一緒に身体を起こし、お互いの身体と周囲の状況を確かめる。

「なんだ、その——桜、おはよう」
「先輩、あ、あの……」

そして、記憶もばっちり残っている事を交わした視線で理解する。桜の目は落ち着かず、素早く起きあがると布団の上に正座し、そのまま……後ろにずるずるとにじり下がっていく。俺は胡座で、ライダーは膝を流して端座していた。動くとぷるんと揺れる桜の大きな胸。

——それは健康優良男子の俺にとって、それは目の毒だった。

「おはようございます、桜、士郎。特に士郎はお疲れ様です」

ライダーは薄く余裕の笑いを浮かべながら言ってくる。お疲れ様というのは、やっぱり2回に1回で合計三回分のことを言ってるんだろう、間違いなく。体を起こしても体軸のシャフトが摩耗している感じで、そのままぽきっと折れて倒れ込みそうになる。

……そんな俺よりも、桜が気になる。桜に顔を向けると、こっちを見ていなかった。ライ

49

ダーも見ていないし、視線の先にあるのは桜自身の膝頭で、首が九〇度折れ曲がってまるで説教される子供のように、正座の姿勢で固まっていた。

「お、お疲れ様ってライダー、俺は疲れてないぞ?・う、うん」

「……無理しなくても結構です、桜の背中でそのまま眠り込んでいましたから――桜も気持ちよさそうに失神していたので、お二人の熱い様子は羨ましい程でしたよ」

そんなことをライダーに言われると、益々桜が固まっていくような気がする。このまま小一時間動かないんじゃないかな、息してるのかな、と心配になる桜の羞恥の素振り――それはそっと腕を回したくなるもじもじとしたかわいらしさがあったが。

「もっとも――」

ライダーはふ、と唇を噛むように笑う。視線がどきっとするほど艶めかしい。

あんなに綺麗なライダーに色目を向けられると、こんなに枯れ果てたはずなのにまだ掻き立てられる気がする。現金なのか、馬鹿なのか……

そっちを見ていると心がよろめきそうなので、ぷいと庭を見る。暮色に滲む、庭木。

「私も久しぶりに愉しませて貰いました。士郎もあれほどに若く瑞々しいといいものです」

「だっ、だっだめ!・ライダー!・」

庭を見て心を紛らわせていた俺が、いきなり横から押し倒された。

正座して固まっていた筈の桜が、俺に飛びかかってきたのだった。もちろん桜の下敷きになる、そうなると胸とかお腹とか二の腕とかが被さってきて、柔らかくて、良い薫りがして意識がオーバーフローしかねない、この桜の身体……

「ら、ライダー?・衛宮先輩は私のものなの!・その、あれはその、ご褒美のお裾分けだから私が見てないところで先輩とライダーがエッチするのは、駄目なの!」

俺の上でそんな抗議を述べる桜。でも、それより目の前でたゆんたゆんと揺れる大きな胸の方がどうしても――気になる。こんな桜の身体の下になっていては、惑わしくて俺の意見も何もあったものではない。

「いや、桜落ち着け、その、俺がしたいのは桜なんだから」

「でも先輩すごく、ライダーとしてるときに気持ちよさそうでした!・

「桜とした時も気持ちよかったんだから!・」

「だって、私先輩が私にえっちしてくれたときの顔、見てません!・」

声を張り上げて何を俺たちは言い合ってるんだか……

くすり、と忍び笑いが漏れる。折り敷きあっている俺たちを微笑ましく見守るライダー。途端にこんなに馬鹿ップルな恥ずかしくて、かぁぁと赤面する。

「いえ、桜としている時の方が気持ちよさそうでしたね、私の時はすごく厳しそうで……やはり士郎には桜が一番なのでしょう、身体のこともありますから」

冷静なコメントをありがとう、でも物事の解決に繋がってない気がする、ライダー。

確かにライダーはずっと俺を見ていたし、桜は最後は後背位だったから……上に乗っかっている桜は照れて恥ずかしがっている。ふと下から桜に声を掛けた。

「じゃぁ、見えるように……もう一回する?・」

「え、え……そんなの卑怯です先輩!・もうもうもう!」

何が卑怯なのか分からないけど、ぽかぽかと胸を叩く桜。顔が真っ赤で困り切っているけども、それと一緒に胸が揺れて揺れて……ふさふさと、もう目の毒ったらない……手を伸ばしてその揺れをしっかと抑えたくなる。

……いや、今だって足が絡み合って居るし、精も根も尽き果てたはずなのにふつふつと精が湧く気がしてくる。次出すと出てくるのは血かもしれないな、と思うけど。

ぷるんぷるんって、もう、そんな俺を試さないでくれーっ

「桜、落ち着け、胸が胸が胸がー!・」

「先輩の胸がどうしたんですか!・」

「桜のっ、桜の胸っ、桜のおっぱいがっ!・」

そんな俺の悲痛な――なんで悲痛なのかは明確じゃない叫びが、桜を気付かせた。

はっと胸を隠すと、俺の身体から飛び退く。さっきは俺を押し倒して、今度は退いて……目まぐるしい動きだった。布団の上で胸を押さえて動悸を抑える俺と、また正座になる桜。

「さて、先にお風呂を入れてきます。お湯が張れたらまた参ります、では」

ライダーがしなやかに立ち上がると、そのまま軽く頭を下げて廊下に消える。
裸だったけど、それに恥じる様子もなくむしろ堂々としていた。すらりとした脚のストライドで長い紫の髪が靡くのに見入ってしまう。体を起こし、ついそっちを名残惜しそうにずーっと見ていると……

「いたたたた！」

横からほっぺたをつねられる。
拗ねた桜の瞳と口元。

「やっぱり先輩とライダーは……先輩？駄目ですからね？私が居ない間にライダーに秘密ですよとか言われてえっちしたら」
「しません、誓います。桜がしてもいい、というとき以外しません！」

してもいい、といわれても喜んでするのかというと微妙だ。またあんな風に跨られたら死んでしまうような気がする。もともとライダーは吸精できるんだから、何も考えないでしたのは無茶だった気がする。

ぶー、と頬をふくらませている桜。俺も正座して頭を下げる。

「……先輩……その、今日は……私すごく変になっちゃって……すいません」

頭を上げようとすると、桜が今度は下げるのと交差した。
確かに学校からこっちはめくるめくスリリングでエロティックな展開で、こうやって向かい合っていると、今日の出来事は嘘のようだった。そして最後に裸で、正座して反省する俺たち……

……おかしい、やっぱり。この格好でこれはどーやっても。
こほんと咳払いする。おかしくて笑い出しそうになるのを抑え、神妙に……

「桜、その……あんなに頑張らなくても、俺が居るから。俺は困らないし、桜なら何をして貰っても嬉しいから」
「……先輩……はい、私で先輩が喜んで貰えるなら……幸せです、怖いくらい」

桜は微笑む。翳りのない、純真な――
彼女の中で静かに根付き、温かいが芽生えているようであった。生徒会室の桜も、帰り道の桜も、寝室の桜も、今の桜も生き生きとしていて俺の心に温かくしてくれる。桜の力が、俺を俺にしてくれる……そんな思い。

ぽん、と膝を叩く。生きる喜びを胸に、桜を腕に生きていけるなら幸せだ。
この上もなく、他に望むこともなく。

「さて、晩飯当番だったな、俺……うわ、こんな時間か、そろそろ仕込まないと」
「先輩？　その……精が付くものがいいです。私もライダーも、それに先輩も……」
「……あーっははは、いや、わかった、肉はたしか挽肉あったから……」

《おしまい》

51

【編集後記】

どうも、阿羅本です。
Ｍｏｏｎｇａｚｅｒ／睨月舎　３冊目のＦａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ同人誌は、不運のヒロインこと間桐桜さんをフィーチャーした本となりました。皆様お楽しみ頂けましたでしょうか？

桜さんは好きなのですが「人気投票で男性キャラ二人に負けた正ヒロイン」とか「ライダールートはないんですか」とかなかなか散々な事を言われ、黒いし！という心ない台詞で見事に総括されたりする半面、好きな人にはその濃厚さが愛されるというなかなか通向きなキャラクターであると思います。

桜は可愛いんですけどね……と、ここで「けどね」で繋がれるのが黒かったりする桜さんの最大の不幸といえましょうか。彼女は非常にピュアでイノセンスなんですけども、照明の当て方によってはどうしようもなく恐く見えてしまう事がままあり、それが「桜が恐い」という躓きになってしまうのですね、自分で発光できる凛や、常にイメージが清いセイバーとの違いといえましょうか。

あと、ライダーが……ライダーが反則（笑）。
眼鏡お姉さんなんて美味しい味付けをされたら桜さんでは敵いません……

そんな桜の魅力を可愛く、時に怪しく書くように今回は２本の作品を書いてみました。ライダーさんも居ますけども（笑）。
桜は桜らしい動きをする「桜ロジック発動の瞬間」があり、そこに入れば無意味に強い、ということをおわかり頂ければありがたいです。純情で可愛い桜も良い物ですね。

今回の表紙のデザインは、皇Ｄｅｓｉｇｎｓの皇征介さんに頂きました。お忙しい中に綺麗な桜のＣＧ表紙を書いて頂き感謝でございます。

また、挿絵としてＰＩＮ・Ｘさん、火星田レイ子さん、光河いちめさんに挿絵を頂きました。今回もご協力をいただき、誠に有難うございます。紙面を華やかに飾って頂きいつも感謝に震えております。

また、この本を手に取って頂いた皆様にも有り難く存じます。こちらの本でもお楽しみ頂けるのが、送り手としての最大の悦びでございます。

それでは皆様、どうかこれからもよろしく御願いします。でわでわ！！

2004/11/30　阿羅本　景

FateSeeker vol.3

2004年12月30日　第一版発行

制　作	『睨月舎』
発行人	阿羅本　景
編　集	保谷渡辺工房
発行所	睨月舎／Moongazer
	〒202-0005 東京都西東京市住吉町4-4-21　渡辺方
	Mail:QYK02345@nifty.ne.jp
	HomePage:http://moongazer.f-o-r.net
印刷製本	プリンティングイン株式会社(PICO)

（不許複製・転載を禁ずる）